

NATIONAL UNIVERSITY ADMISSION CENTERS

10TH ANNIVERSARY

国立大学アドミッションセンター連絡会議
10周年記念誌

連絡会議10周年に寄せて

東北大学工学研究科教授・前入試センター長

会長 米本年邦

国立大学アドミッションセンター連絡会議が発足して10周年という一つの区切りを迎えました。奇しくもこの時期に本連絡会議の会長を務めさせていただいたご縁から一言申し上げます。

1990年代の入試改革の議論から当時の中央教育審議会や文部省などによって提唱されたAO入試導入を機に、国立大学では2000年前後に相次いでアドミッションセンターが設置されました。このアドミッションセンター相互の交流連絡組織を作ろうと、先発組の大学の発起により本連絡会議の設置が呼びかけられ、2003年に発足しました。当初13大学であった加盟大学は現在24大学に増え、多彩な顔ぶれになっています。加盟大学数だけみても順調に本会議が発展していることが分かりますが、また毎年開催されてきた総会、さらにシンポジウムや講演などにおいて加盟大学間で入試改革の新しい動きや各大学における入試組織改革、高校生や保護者への広報について幅広い協議や交流が活発に行われてきました。こうした実績については、本記念誌にも寄稿されています柴田洋三郎先生始め歴代の会長と事務局を担当された各大学のご尽力、さらに加盟大学のご協力によるものと考えています。これら関係の先生方と大学に改めて御礼申し上げます。また第1回総会からご支援いただいた文部科学省の大学入試室にも感謝の意を表したいと思います。

国立大学にAO入試が導入されて10年以上が経過しています。着実に実施大学と定員が増える一方で、学力問題など様々な課題も指摘され、いま中央教育審議会では「高大接続」をテーマに改めて入試改革が議論されています。私も東北大学のAO入試に長く関わった者として、AO入試の健全な発展のため、本会議がこれまで以上に役割を発揮し、入試改革の議論に貢献していくよう願ってやみません。本会議がますます活性化していくよう加盟大学、関係者各位のご支援とご協力を重ねてお願い申し上げます。

National University Admission Centers 10th anniversary

国立大学アドミッションセンター連絡会議 10年の歩み

■平成15年6月に設立総会

平成 11 (1999) 年 4 月、国立大学初の AO (アドミッションズ・オフィス) 入試の実施組織として、東北大学、筑波大学、九州大学の 3 大学にアドミッションセンターが設立され、12 年度から AO 入試がスタートしました。その後、平成 16 (2004) 年 4 月の国立大学法人化に前後して、多くの大学に同様のセンターが設置され、AO 入試が徐々に拡大して行きましたが、時代の変化とともに、各センターの役割も AO 入試に留まらず、広報や高大接続などさまざまに広がってきました。詳しくは 43 ページからの「加盟大学の組織と概要」をご覧ください。

さて、国立大学アドミッションセンター連絡会議は、国立大学で AO 入試がスタートして 3 年後に 13 大学で活動を開始しました。平成 15 (2003) 年 6 月 4 日にパレスホテル立川 (東京都立川市) で開催された第 1 回総会 (設立総会) では、「高等学校・大学間の接続関係の改善及び加盟機関における入学者選抜等の業務改善に関する研究協議を行い、あわせて加盟機関相互の交流促進を図る」ことを会の目的とし「国立大学のアドミッションセンター、及び国立大学において高等学校・大学間の接続関係の改善及び実践に携わる機関によって構成する」ことなどを盛り込んだ「連絡会議会則」が承認されました。

右の一覧は、第 1 回設立総会から第 10 回総会まで、開催日時・会場と議題等をまとめたものです。設立当初は、共同研究・科研費獲得の機運もありましたが、ここ数年は大学からの活動報告に留まっています。各大学とも AO 入試を実施する学部の増加や受験生・高等学校への対応、担当業

務の拡大などで手一杯になっていることが一因かもしれません。

■キラリと光る逸材に期待

一般入試とは異なり AO 入試は、各大学で出願要件や実施時期、選抜方法がまちまちで、標準的な形態の示しにくい入試になっているのが実態です。高等学校においても、合否判定の基準が不明確であるとか、「青田買い」入試であるとかの理由で、生徒に AO 入試を勧めない高校もありますが、一方で、専門領域への興味・関心や意欲をみる入試として、その役割を評価する声も少なくありません。

国立大学に AO 入試が導入されて 14 年が経過しましたが、社会的な「評価」が定まっていないことは事実です。しかし、多くの私大で実施されている AO 入試とは異なり、国立大学の AO 入試は募集人員も極めて少なく、工夫を凝らして他大学とは一味違った選抜を実施している大学も少なくありません。その「成果」として、AO 入試入学者の中には、入学後の成績や活動が高く評価できる“キラリと光る逸材”が少なからず存在するのも確かです。22 ページから登場する、AO 入試で入学して優秀な成果をあげた (あげている) 卒業生 (在学生) たちの更なる活躍を祈念し、AO 入試に対する社会的な評価が高まることを期待するところです。

■次の10年に向けて

平成 12 年度から 3 大学でスタートした国立大学の AO 入試も 25 年度は 47 大学 (国立 82 大学の約 6 割) にまで拡大しました。文部科学省「国

立大学改革強化推進補助金」に「四国5大学連携による知のプラットフォーム形成事業」が採択され、愛媛大学を基幹校に、5つの国立大学で「四国地区国立大学連合アドミッションセンターの設置とAO入試の共同実施」が進められています（愛媛大学ホームページによる）。東京大学や京都大

学で推薦入学が検討されているなど新たな動きもあるようです。

10年後の20周年記念誌の発行に向けて、この連絡会議が高大接続の改善及びAO入試をはじめとする入学者選抜等の改善に少しでも寄与できるように、活発化していこうではありませんか。

総会の開催状況

回	開催日時・会場	議題等	会長校・事務局
1	平成15年6月4日 14:00～16:00 パレスホテル立川	<ul style="list-style-type: none"> ・連絡会議設立の趣旨説明 ・会則等の検討 ・役員を選出 ・今後の活動方針の検討 	会長校：九大 事務局：東北大
2	平成16年6月2日 10:00～12:00 国際ホテル松山本館	<ul style="list-style-type: none"> ・新会長就任の承認 ・役員改選の予告 ・総会経費、ニューズレター経費の事務局負担について ・共同研究実施のためのWG 設置について ■シンポジウム 「アドミッションセンターの機能充実の可能性を探る」 	会長校：九大 事務局：東北大
3	平成17年6月1日 10:00～12:00 メルパルク東京	<ul style="list-style-type: none"> ・役員改選 ・新加盟の承認 ・会費の徴収について ・共同研究について ・大学からの報告 	会長校：九大 事務局：東北大
4	平成18年5月31日 10:30～12:00 静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」	<ul style="list-style-type: none"> ・役員改選 ・新加盟の承認 ・運営費の徴収について ・会計報告 ・大学からの活動報告 ①鳥取大学 ②広島大学 ③愛媛大学 ・共同研究について 	会長校：九大 事務局：筑波大
5	平成19年5月29日 14:00～16:00 新宿 NSビル	<ul style="list-style-type: none"> ・役員改選等 ・会計報告 ・大学からの活動等報告 	会長校：九大 事務局：筑波大
6	平成20年5月25日 14:00～16:00 新宿住友ビル 住友スカイルーム	<ul style="list-style-type: none"> ・新加盟の承認について ・会則の改正 ・会計報告 ・大学からの活動等報告 	会長校：九大 事務局：九大
7	平成21年5月19日 13:00～15:00 学術総合センター 中会議場	<ul style="list-style-type: none"> ・役員改選 ・新加盟の承認 ・会則の改正について ・会計報告 	会長校：九大 事務局：九大
8	平成22年6月7日 12:30～14:30 北九州国際会議場 国際会議室	<ul style="list-style-type: none"> ・新加盟の承認 ・会則の改正 ・会計報告 ・大学からの活動等報告 北大「大きく入り試」 九大「21世紀プログラム」 	会長校：九大 事務局：九大
9	平成23年5月24日 12:00～14:40 早稲田大学 小野記念講堂・大隈記念講堂	<ul style="list-style-type: none"> 総会（12:00～12:15 小野記念講堂） ・役員改選 ・会則の改正 ・会計報告 ■緊急シンポジウム（13:00～14:40 大隈記念講堂） 「大学入学者選抜の危機対応」 	会長校：九大 事務局：九大
10	平成24年5月30日 13:00～14:50 岡山コンベンションセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・会計報告 ・10周年記念事業の実施について ■10周年記念講演 講演：柴田洋三郎氏（福岡県立大学長） 演題：国立大学AO入試の歩みと今後の課題 	会長校：東北大 事務局：静岡大

contents

連絡会議 10 周年に寄せて	1
----------------	---

東北大学工学研究科教授・前入試センター長
会長 米本年邦

国立大学アドミッションセンター連絡会議 10 年の歩み	2
--------------------------------	---

福岡県立大学学長 柴田洋三郎講演録	5
-------------------	---

キラリと光る学生達 22	加盟大学の組織と概要 44
--------------	---------------

北海道大学	23	45
旭川医科大学	24	46
岩手大学	25	47
山形大学	26	48
東北大学	27	49
茨城大学		50
筑波大学	28	51
福井大学	29	52
富山大学	30	53
静岡大学	31	54
京都工芸繊維大学	32	55
鳥取大学	33	56
岡山大学	34	57
広島大学	35	58
山口大学	36	59
香川大学		60
愛媛大学	37	61
高知大学	38	62
九州大学	39	63
佐賀大学	40	64
長崎大学	41	65
鹿屋体育大学	42	66
琉球大学	43	67

国立大学アドミッションセンター連絡会議 会則	68
------------------------	----

国立大学AO入試の歩みと今後の課題

国立大学アドミッションセンター連絡会議10周年記念講演 講演録

■日時:平成24年(2012年) 5月30日(水) 13時20分～14時50分 ■会場:岡山コンベンションセンター 302会議室

当連絡会議は、平成15年6月4日に、パレスホテル立川(東京都立川市)で開催された設立総会をもってスタートしました。翌16年の6月2日には愛媛県松山市で第2回総会を、翌々年の6月1日にはメルパルク東京で第3回総会と回を重ね、平成24年5月30日(水)には、岡山コンベンションセンターで第10回総会を開催するに至っています。

例年、総会では役員改選や会計報告などの定例議題に加え、新加盟の承認や大学からの活動報告など時宜を得たテーマを取り上げてきましたが、岡山市での総会は、第10回という節目の年にあ

たることから「10周年記念講演」を企画し、九州大学副学長時代に当会の会長も務められ、平成24年3月まで大学入試センター研究統括官(副所長)でいらした柴田洋三郎先生(現在:福岡県立大学長)にご講演をお願いしました。

演題は「国立大学AO入試の歩みと今後の課題」で、AO入試が導入された経緯と変遷、大学入試研究の現状、追跡調査結果の検証、高大接続テストの検討状況、国立大学AO入試の将来像等々、入試関係者にとって大変参考になるご講演をしていただきました。



(写真/公立大学法人 福岡県立大学)

柴田洋三郎 (福岡県立大学長)

平成 9年 4月 九州大学 副学長
平成 11年 4月 九州大学アドミッションセンター長
平成 16年 4月 国立大学法人九州大学 理事・副学長
平成 22年 3月 九州大学名誉教授
平成 22年 4月 独立行政法人大学入試センター試験・研究統括官(副所長)
平成 24年 3月 大学入試センター名誉教授
平成 24年 4月 公立大学法人福岡県立大学 理事長・学長

■AO入試導入の背景

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました柴田です。数年前までは、そちらのほうに座っていた者です。この連絡協議会総会も10回を迎える区切りとして、これまで関係してきた者として何かお役に立つお話しができれば幸いです。

まずはAO入試の始まりについてお話ししたいと思います。AO入試は、1990年に慶應義塾大学が湘南藤沢キャンパスを開設したときに、初めて導入されました。そのときは追従する大学があまりなかったのですが、1997年の中央教育審議会第二次答申の中で、AO入試導入を検討すべきであるということがうたわれて、一挙に関心を集めたと記憶しております。アメリカの大学にはアドミッションズ・オフィス(AO)というのがある、これが入試業務を担当する組織ということは、もう皆さんご承知だと思います。

ただ、これは後ほどお話ししますが、アメリカの大学にはアドミッション・オフィサーという特殊な業務の方がおられて、その方々が全て入学者を決めているようです。いっぽう日本で導入されているAO入試は、文部科学省では「詳細な審査・時間をかけた丁寧な面接を組み合わせることによって、受験生の能力・適性や学習に対する意欲、目的意識等を総合的に判定する方法」と定義していて、これに従った選抜をやる部署としてアドミッション・センターあるいはアドミッション・オフィスというものが各大学に設置されているということになります。

1999年には国立の3大学、東北大学、筑波大学、九州大学にアドミッション・センターが設置され、翌年から国立3大学、それと私立・公立の70ぐらいの大学で導入されたことから、2000年がAO入試元年と呼ばれるところでした。その後、着実にこの入試方法が増えてまいりまして、2011年のデータでは、国立で47大学、公立で22大学、私立では80%ぐらいの大学で実施されています。

わたしの役割としては、AO入試の歩みを紹介することですが、まず、導入の背景としては、戦後、成功した日本の高度経済成長が、21世紀を前に曲がり角に来ていたことが挙げられます。要するに、世の中が産業社会から21世紀型の知識基盤社会に向かう

中で、大学での教育が、それまではキャッチアップで対応できていたものが、フロントランナーとしての役割を果たす人材を育成することが必要になり、さらに、大学教育のグローバル化が求められたわけです。

そのようなことで、大学教育に対する期待と、その裏返しとしての不満が産業界の中であって「どうも創造性とか課題発見・解決能力とかが足りないのではないか」という意見が1990年代ぐらいからだいぶ強く言われるようになりました。

そのひとつとして、入学者選抜がどうも時代に合っていない、学力偏重で偏差値信仰がある。これは社会がそのように振る舞っていて、必ずしも大学はそうではないのですが、適性や意欲、関心それから人物等々で入学者を選ぶべきではないか、といった説が出てきたのでしょう。その先行事例として、先ほどもご紹介しました、慶應義塾大学が湘南藤沢キャンパスで総合政策学部と環境情報学部を開設したときに、その一部でAO入試と銘打った選抜方法が導入された訳です。

ところで、なぜ、わたしがAO入試に関わったかということなのですかけれども、皆様方は、試験問題などの作題にも関与していると思います。でも、これは結構ミスが多いのですね。もう時効だから言えますが、わたしが所属しておりました九州大学でも毎年のようにミスが出ていました。ある年に国語の問題で「屈辱」という漢字を書かせたのですが、隣のページの問題文に「屈辱」という字が出ていた。翌日の新聞の見出しに「九州大学の屈辱」と出て、そのときに医学部出身の杉岡総長が、「何たることだ。たるんでおる」とカンカンになって怒りました。わたしは、そのときに医学部で一番若手の教授だったものですから「おまえがちゃんと面倒を見ろ」と言われまして、学生部長という立場で入試問題を一生懸命見るということになりました。

そのとき、たしか1996年だったのですが、ブリティッシュ・カウンシルのお世話で、英国大学視察がありまして、国大協の主だった方々、東京大学の吉川(弘之)先生、京都大学の井村(裕夫)先生、阪大の熊谷(信昭)先生、東工大の木村孟先生、それにわたしも杉岡(洋一)先生と一緒に加わってケンブリッジとか、ワーウィックとか、先進的な取り組みをしてい

る大学を視察することになりました。

英国は、サッチャー首相在任中にエージェンシー化で、大学も随分と変わりました。基本的には国立ということになっていますが、街のど真ん中に、昔のポリテクと言われるものが一挙に大学になって、そのような大学も視察をしました。びっくりしたのは、これはスーパーマーケットのような大学だと思いました。要するに、お客さんはいつ来てもいい、好きな時間の単位を取っていいというやり方でやっている。日本もそのうちこのようになるのかなと思って帰ってきました。当時、日本で起こっていた議論が国立大学の独立行政法人化というエージェンシー化で、そのための視察でもあったわけです。

併せて、入学者選抜制度の検討も、ケンブリッジのカレッジやAOに行き、どのようにして学生を選んでいるのかということも視察してきましたが、驚くべきことに非常におおらかといいますか、要するにペーパーテストなどはやってないのです。イギリスでは面接で選抜している。「面接をして何を見るのですか」と聞いたら「先生が、こいつは学生として教えたと思う子に丸を付けるんだ。それを入学させて鍛えて3年間ないし4年間で卒業させる」と。そのように非常におおらかなお話で「じゃ、学力はどのようなのですか」と聞いたところ、そこはレベルAとか、そのような基本的な学力検査がありますので、それはまた別の機会にイギリスに行っているいろいろ調べましたが、日本とはえらい違いだったのです。

そうこうしているうちに、1997年6月の中教審の第二次答申で「アドミッション・オフィスでの入学者選抜を日本でも進めるべきである」という答申が出まして、どうやらこれは一つの方向性ではないかということで、今度はアメリカに行き、いろいろな大学を見てまいりました。

アメリカの大学では、アドミッション・ポリシーが明示され、極めて多様な選抜をしていることが分かりました。平等性、公平性、客観性、透明性、公開性、このようなものが担保された上でマッチング、すなわちアドミッション・ポリシーに合っているかどうか、面接や小論文で判断される。いっぽう日本の大学では、学校教育法施行規則第144条で「学生の入学などは

教授会の議を経て、学長が、これを定める」となっている。教授会の専権事項であるというのが共通の理解だったわけで、どのようにしてこの部分をクリアさせるか、AO設置計画や概算要求でいろいろと苦労しました。

アメリカの大学は、必ずしも学力の上位層だけを採用するというものではありません。アメリカの大学における多様な選抜というのは、アドミッション・ポリシー(AP)で、例えば男女の比率とか、非常に微妙な問題だと思のですが、人種とかそのようなもので多様な学生を採用するのがAPだったのです。

いまだに鮮明に記憶が残っていますが、日本でも非常に評価の高い州立大学のアドミッション・オフィスへ行って、オフィサーの女性の方にいろいろお話を聞いていたところ、パッと耳に入ってきたのが「デベロップメントも重要だ」とおっしゃったことです。デベロップメントというのは何だろうと尋ねたら、要するに寄附金なのですね。5%ぐらいの学生は、それで選んでもいいのだと。「体育館などが出来たらいいでしょう」と非常に分かりやすいお話をなさっておられて「へえー、そういう考えもあるんだなあ」と思いました。

日本も、その後、国立大学法人になって寄附金などを一生懸命集めることになったのですが、まだそこまでは行っていません。多様な選抜というのは、そこまで含めるということかとびっくりした次第です。確かに、アラブの石油億万長者の息子とかがいっぱい入っているとか、中国のお金持ちの息子さんが入っているとか、いろいろあるようです。

■アドミッション・センター設置の経緯

わたしが九州大学のアドミッション・オフィスの設置計画と概算要求を策定した当時は栗山さんと野家さんが文科省の大学入試室長だったと思います。九州大学の事務局長板橋さんから、これは何とか導入しなければいけないとご下命を受けました。しかし、どうもわたしのイメージとして、これは推薦入試とあまり変わらないのではないかと。だから、栗山さんやご担当の三浦係長などとお話ししたときに「推薦入試と同じみたいですけど」と言ったら「いやー、柴田さん、おた

くでは推薦入試は裏口じゃないだろうけど、世間では横口入学みたいに思われているんだ」という具合に言われまして「とにかく推薦入試とは違う形での入試をやっていたらいい」と要望されたわけです。

ということで、当時、本学では法学部と薬学部などで推薦入試をやっていたので、まず法学部に行って「看板を書き換えていただけないか」と頼んだのですが結構固いのですね、法学部の先生というのは。学校教育法があるのに、おまえたちは何ということをとと言われて、教授会の権限というものをAOでどのように付託するか苦心していろいろな理屈付けをやりました。その権限をAOという組織に包括的に付託して、最終的には教授会でその全ての過程が適正に行われたという承認をもって入学者を決めるという、何かややこしい話なのですけれども、そのような形にしました。

先行事例の慶應義塾大学はどうかというと、AOという組織のところに当該の学部の先生が委員として参加されて選んでいるという格好になっていまして、それならよかろうと、法学部推薦入試の看板をAO入試に替えさせていただけたのです。

次にまた、国立大学にはオフィスという名称の部署は無く、遺伝情報センターなどセンターならいろいろあったわけです。そこで、アドミッション・センターという形で設置しようということになったのですが、当時はまだ法人化前で、それぞれの部署には予算定員というものが張り付いていました。さらに、大学改革の一環として、予算定員を持ってくるときに純増は認められず、どこかに既にある定員を一部配置換えすることが必要だったわけです。これに九州大学では大変苦労いたしました。苦労して、どこかから持ってこなければいけないわけですね、定員を。それで、どこかから持ってきたわけですが、後で聞いてみますと、東北大学では工学部が非常に積極的で学部定員を融通されたようです。もうひとつの筑波大学は、全学で定員管理していますから非常にやり易かったわけですが、九州大学では、この定員の振替元で本当に苦労しました。

実は、純粋な増員は一人だけだろうと思っていました。一応、要求としては2人の純増を要求したのですけれども、まず来るはずがないという読みだったので

す。しかし、随分と文科省では前向きに考えていただいて2人来ってしまったのです。そうすると、今度は逆に振替が余ってしまって、これをどうするかで本当に困りました。九州大学ではいまだにこの件は解消してないのではないのでしょうか。

また、当時は若かったこともあったので大学入試センターに行きまして、センター試験の成績をAO入試にも使わせてもらえないかとお願ひしてみました。当然「うん」と言ってくれるだろうと思ったら、当時、AO入試というのは、要するに学力ではない選抜をやる、センター試験と相反する商売敵だという感じでして「あなた、よくそういう話でここに来られましたね」と言われまして、入試センターには、永年委員としていろいろお役に立っているつもりだったのだけれども、事がこのようになると、えらく世間というのは冷たいなと思いました。

その後、国大協から要請してAO入試についてもセンター試験の成績提供をしていただけたことになりました。古い先生方はご存じだと思いますけれども、しばらくはAO入試の成績請求に推薦入試の紙を代用して使っているという時代がございました。

アドミッション・センターの設置に関しては、他大学については、どこが申請しているのか分からなかったのですが、開いてみれば、名称も、例えば筑波大学はAC（アドミッション・センター）入試と言うし、東北大学はAO入試と言うし、われわれは、理念からしてあれは入学試験ではなくて選抜であるというA O選抜という名前を付けまして、三者三様でした。そのようなことで、やり方から何から、いろいろと形が違っておりましたけれども、とにかくアドミッション・センターが国立大学にも設置されて、その中で選抜をするということになったわけです。

よく「日本型のAO入試」などと言われますが、日本型といっても何なのだろうといまだによくわからないなと思っております。ただ、これが非常にポピュラーな入試になったことは事実です。導入前は一般選抜が70%ぐらい、推薦が27%ぐらいで、大体、このような割合だったのですけれども、推薦が頭打ちになったのに比べ、AOだけは着実に23年度までは増えています。その分、一般入試の割合が減っている。

ということで、AOというのは、われわれの理解では「丁寧な面接などの組み合わせにより、受験生の能力、適性、学習に対する意欲、目的意識を総合的に判定する選抜方法である」ということ。ただ、これは、外部の方には全く関係ないことですが、要するに教授会の専権事項というわけではなくて、選抜の専門部門による選抜ということで、学校教育法施行規則との調整というのが学内的には随分苦労したところでした。

AO入試は表向きでは自らの意思で出願できる公募型の選抜、高校長の推薦状が要る推薦入試などの特別選抜とは別枠で、非常に自由度が高かったのです。形としては、アドミッション・ポリシーに基づいた選抜方法で、多面的・総合的な評価をやる、様々な選び方がありますよというのですが、そのために行き過ぎの面も少しあったと思います。実はここがまだ十分に進んでいないのですけれども、高校との相互コミュニケーションを重視するのであれば、できれば学力が低い子には入学前の導入教育をもっとやるべきということなどです。

アメリカの視察で一つ非常に印象に残っていたのは、先ほどのデベロップメントの話以外に、高等学校の成績表とか、日本でいうところの調査書など出願書類がどれくらい信用できるのですかと尋ねたところ「あのような書類はやはり信用度に欠ける。クリティカルなときには高校の先生に電話を掛けるのだ。電話だと証拠が残らないから本当のことを言ってくれる。本当の情報が得られる」と。「ああ、こんなもんかなあ」と思いました。

アメリカではアドミッション・オフィサーという専門の人がいますので、大学と高校の教師の間で情報の交流があるということなのですが、日本は、高等学校の先生もお忙しいのか、まだそこまでは行っていないように思います。また、日本の国立大学では、入試課の職員は学生部の事務職員です。いろいろな職場を回らなければならない、私立大学は状況が違いますが、優秀な方が入試にずっといることは少ない状況でありました。そのようなときにAOを設置しますと、そこで専門的なスタッフ、教員が育つだろうというイメージがありまして、日本での入試研究が深まるという期待も抱いて、苦労しながらもAO導入に積極的に関与

した、わたしの大きなインセンティブになりました。

本日お集まりの皆さまのように、国立大学でもこのようにたくさん入試研究の専門家集団が出来たというのは、あのときの予測が当たったと大変うれしく思っております。10周年を迎えて、余裕を持って過去を振り返って見られるというのも成熟したおかげかと、皆様方のこれまでの努力に感謝したいと思っております。

■入試研究から見えてくること

次に選抜の追跡調査について話をしたいと思えます。当時よく言われていたのは、どのような入学試験問題を作ると優秀な子が採れるのかという研究をちゃんとやれということでした。入学試験の問題の出来が悪いから入ってきた学生が良くないのだというような話がありまして、入試研究をやれば、どのような科目が後々の教育に効果があるかとか、どのような問題を出せばいいのかということが分かるはずだと言われていました。

例えば入試研究で「入試の成績と入学後の成績とはほとんど関係ない。それは、ひとつには入試そのものに選抜効果があるのだ」というのが今は常識になってきています。アドミッション・センターには、いろいろな研究者が集まってきていて、そのような研究は随分膨らんだのではないかと考えております。しかし残念ながら一般入試については、教授会の専権事項というのでなかなか口が出せなくて、AO選抜入学者の追跡に限定されているような傾向があるのですけれども、そのようなことが今後変わっていただければいいと思っております。

各国立大学には入学者選抜研究委員会というような名称の追跡調査を行う組織があって、毎年、報告書を出しています。各大学のアドミッション・センターには、それを専門に研究する方が集まっています。以前は国立大学だけだった入研協が、国立大学の法人化に合わせて、国立・公立・私立を併せた全国大学入学者選抜研究連絡協議会という集まりになりました。ただ、入試研究が盛んになっても、調査報告書が非公開で、ほとんどの書類が取り扱い注意になっているので、研究成果が入試改革に反映されないという嫌いはいまだ

にあるように感じています。

もう一つ大きいのは、やはり選抜というのは教授会の権限であって、少なくとも一般入試というのは教授会で選ぶのだというところが、まだ意識として強い点でしょう。入試研究で明らかになるスリット効果とか選抜効果というのがあるということが、なかなか分かっていただけないのですね。

このあと某大学での研究事例をご紹介させていただきますが、これは要するに「入試順位の識別機能よりも、むしろ全学教育の弁別機能のほうが大きい」ということです。入試改革と教育カリキュラムの改革というのは、相互に反映させて進めていって大学の教育改革につなげていただければと思います。

【図①・②】は、某大学で4年間に9,600人を追跡したデータです。前々から言われていたのですけれども、理系というのは積み重ねなので、全学教育から専攻教育に行くときは、全学教育や初年次の成績がいい学生は後々までそれが続くだろう、これは納得できます。ところが、入試時の順位が下位の学生も全学教育で上位だと専攻教育でも上位になる。要するに、全学教育で良ければ、入試の成績というのはあまり後々ま

で尾を引かないというのが歴然として出てきたのです。さらに「理系だとそうだろうな。文系は違うよねえ」と言っていたら、これは文系についても全く同じパターンなのです。

要するに、前期日程入試で下位の学生も全学課程で上位に入っている学生は専攻でも上のほうに行く確率が極めて高い。逆に、入試時の順位が上位であっても全学課程でパフォーマンスが悪い学生は、大体、専攻教育でもパフォーマンスが悪いというのが全ての入試区分で見事に出ていまして、これには驚いたわけです。

もうひとつ、当時、高等学校から来る書類について「結構、調査書は信頼性がある」とよく言われていたのですが、追跡調査をしてみると、全学教育で上方に行く、その圧力にはなる。高校でも下位の学生は、どうも下のほうに行く傾向がある。高校で上位だと、入試で下位の学生でも全学教育で上位に入っていると専攻教育でも上位に入ることが、わかりました。

繰り返しになりますが、全学教育、初年次教育というのは後々まで尾を引くということです。ある程度の選抜効果がある入試で、上位の者を採っているという前提はあるのですが、初年次にきちんと教育しておく

図①

入試→全学教育→専攻教育の成績レベル推移：理系

入試	→	全学	→	専攻	入試	→	全学	→	専攻
前期上位 【2047人】	↙	上位 (55.0)	↘	上位 (74.6) 下位 (25.4)	前期下位 【1976人】	↙	上位 (44.4)	↘	上位 (72.7) 下位 (27.3)
	↘	下位 (45.0)	↙	上位 (27.0) 下位 (73.0)		↘	下位 (55.6)	↙	上位 (22.9) 下位 (77.1)
後期上位 【315人】	↙	上位 (58.4)	↘	上位 (76.6) 下位 (23.4)	後期下位 【343人】	↙	上位 (49.0)	↘	上位 (72.6) 下位 (27.4)
	↘	下位 (41.6)	↙	上位 (31.3) 下位 (68.7)		↘	下位 (51.0)	↙	上位 (30.3) 下位 (69.7)
推薦 【319人】	↙	上位 (60.5)	↘	上位 (75.1) 下位 (24.9)	その他 【22人】	↙	上位 (36.4)	↘	上位 (62.5) 下位 (37.5)
	↘	下位 (39.5)	↙	上位 (30.2) 下位 (69.8)		↘	下位 (63.6)	↙	上位 (28.6) 下位 (71.4)

必要があるということです。

図③は、一般入試での入学者ですけれども、やはり一番強いのは、専攻教育と全学教育の間の強さです。他のものは、高校と全学教育の関係というのはありますが、入試の成績とはあまり関係ない。ただ、これは、あまり深読みすると危ないことになるのではないかと思います。

もう一つは、図④のように選抜区分で見るとあまり差は認められません。一番悪いのが一般入試ですけれども、これは数が多いせいもあるのだと思います。自画自賛というわけではないですが、AO選抜入学者は少数ですが、この時点では割と平均点は上だということが分かります。このような追跡調査結果を見ると、思い切った選抜、いろいろな試みが結構できるのではないかと思います。

某大学の事例をまとめると、専攻教育の成績に相関するのは全学教育、高校の成績、入試成績の順であり、入試順位による識別機能というのは、あまり高くないということになります。また、全学教育には弁別機能があるので、入学後の初年次教育というのが決定的に重要であると言えるでしょう。高校の成績には、上方

圧力・下方圧力があって、入試成績とは関連しないということから、高・大接続の重要性というのは改めて検討に値するのかもしれませんが、ただ、これは、あくまでも専攻教育の到達度を基準にしているわけで、大学での教育がいかほどのものかと言われたら問題なので、卒業後のパフォーマンスとか、そのようなものは改めて調べなければいけないと思います。

某大学では、このような追跡調査・研究を21世紀プログラムの発足や初年次の教育改革につなげたということです。同様にご苦勞をなさった他の大学の例としては、岡山大学や筑波大学などが挙げられますが、最近では北海道大学で総合入試という思い切った入試をやっておられます。入試の追跡調査・研究というのは、このような形でも成果が出てくるものと信じています。

■国公立と私立で全く異なる大学入試

ご承知のように、日本の大学というのは少なくとも選抜区分からいって三つのセクターに分けられます。国立大学、私が現在勤務している公立大学、それから数では圧倒的に多い私立大学があります。従って、入

図②

入試→全学教育→専攻教育の成績レベル推移：文系

入試	→	全学	→	専攻	入試	→	全学	→	専攻
前期上位 【1147人】	→	上位 (56.8)	→	上位 (74.5) 下位 (25.5)	前期下位 【1137人】	→	上位 (44.3)	→	上位 (70.2) 下位 (29.8)
	→	下位 (43.2)	→	上位 (27.1) 下位 (72.9)		→	下位 (55.7)	→	上位 (23.5) 下位 (76.5)
後期上位 【276人】	→	上位 (46.7)	→	上位 (79.1) 下位 (20.9)	後期下位 【268人】	→	上位 (40.3)	→	上位 (75.9) 下位 (24.1)
	→	下位 (53.3)	→	上位 (26.5) 下位 (73.5)		→	下位 (59.7)	→	上位 (24.4) 下位 (75.6)
推薦 【160人】	→	上位 (60.0)	→	上位 (74.0) 下位 (26.0)	その他 【47人】	→	上位 (48.9)	→	上位 (65.2) 下位 (34.8)
	→	下位 (40.0)	→	上位 (25.0) 下位 (75.0)		→	下位 (51.1)	→	上位 (12.5) 下位 (87.5)

試についていろいろ判断するときには、このセクターのことを十分に考慮に入れなければ、なかなか本当の解決にはならないと思ってこの分析をさせていただきました。

〔図⑤〕は、基礎データは、文部科学省の大学入試室で毎年出しているものを集めたものです。一番減っているのが青い所ですが、私立の一般入試で、どんどん減っています。私立の推薦入試は、あるところまでは増えたのですが、ここ数年で増えているのがAO入試です。国立大学のAO入試も、随分少ないですけども、少しずつ増えている傾向があります。

図⑤は、その割合の推移を見たものですが、国立大学の一般入試は80%割程度にとどまっています。公立大学は推薦が多いので、一般入試は80%から70%ぐらいです。一番顕著なのが私立大学の一般入試で、グーンと減って、既に50%を切っています。それに対して私立大学の推薦入試は、5割まで良くなったので一時期増え、50%まで行くかと思ったら40%ぐらいのところまで平行線になっています。公立大学というのは、結構、推薦入試の比率が高いことも分かります。

次に、AO入試についてみてみると、私立大学では

成績レベル間の関連：「一般」入学者

図③

	高校	入試	全学	専攻	
高校成績		.127*	.342*	.248*	前期日程
入試成績	.099*		.135*	.098*	
全学成績	.300*	.090*		.507*	
専攻成績	.270*	.097*	.551*		
後期日程					

数値は時間的に後の変数を従属変数とした Somers の d^* (は1%有意)。右上三角形は前期日程、左下三角形は後期日程。

試験区分別にみた全学教育・専攻教育の成績平均値

図④

試験区分	全学教育		専攻教育	
	平均値	人数	平均値	人数
一般	77.45	9049	75.83	7522
推薦Ⅱ	78.94	175	77.70	175
推薦Ⅰ	78.77	264	76.19	244
帰国子女	78.14	28	77.74	23
留学生	78.20	51	73.46	46
AO選抜	80.05	76	79.33	60
計	77.54	9643	75.90	8070

試験区分による分散分析：【全学教育】 $F=8.87$ (有意水準.000), η^2 乗=.005
【専攻教育】 $F=4.36$ (有意水準.001), η^2 乗=.003

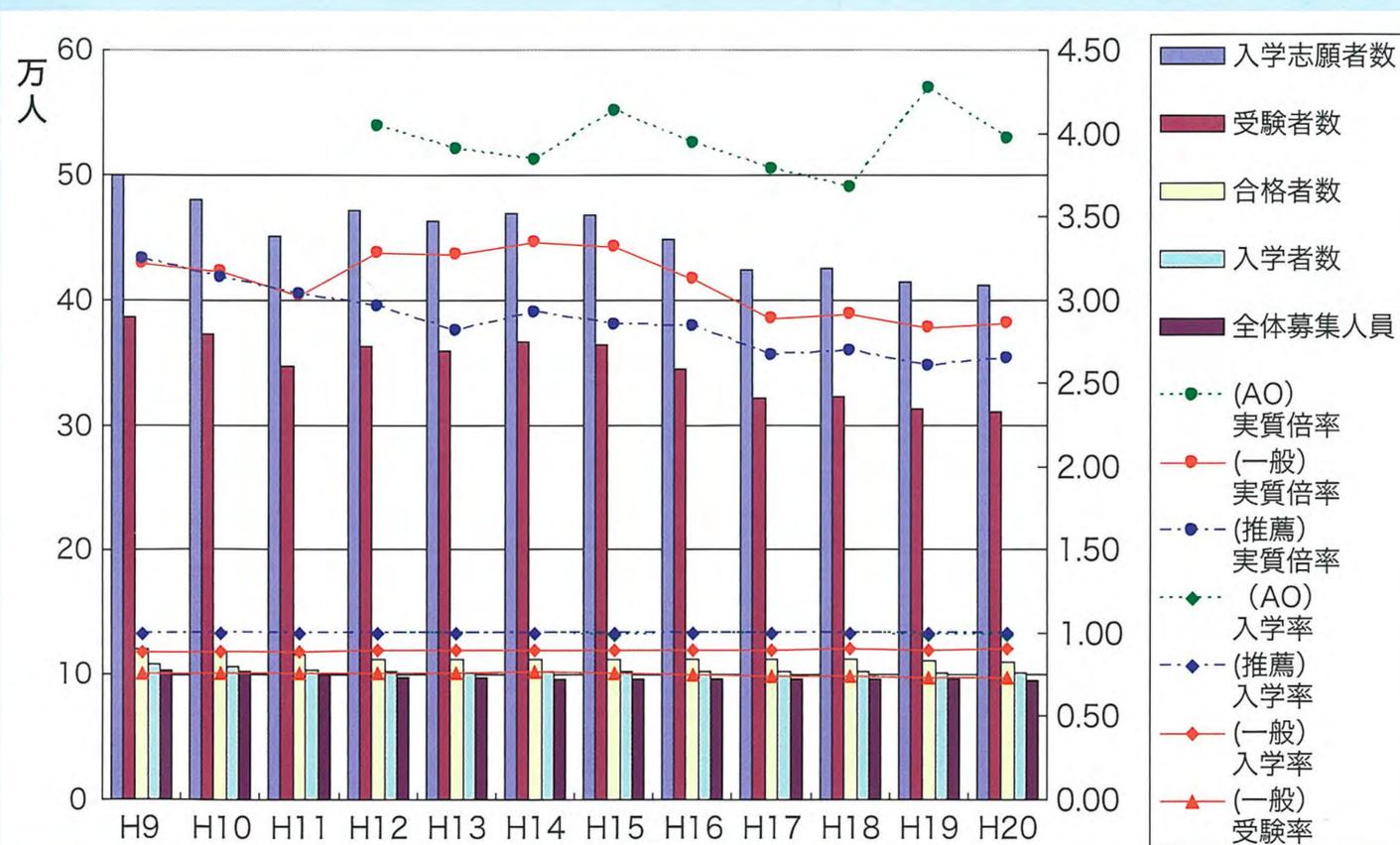
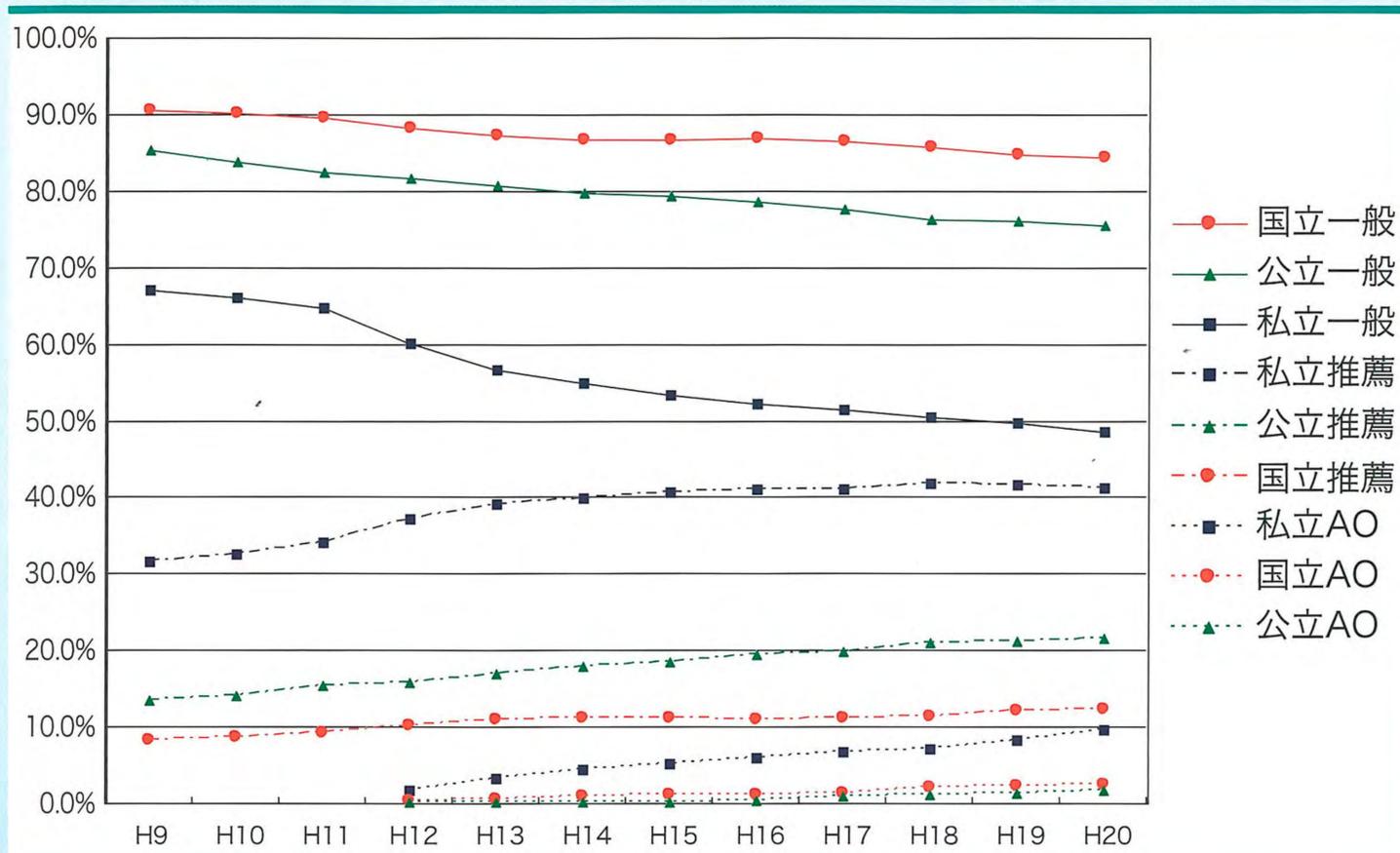
着実に増えて10%ぐらいまでになっています。途中で推薦入試が一般入試に代わりつつありましたが、推薦入試が飽和状態になったこともあり、その後はAO入試が取って代わっている状況です。

図⑥～図⑧は、国公私立大学別に倍率や受験率、入

学率の推移をみたものです。図⑥の国立大学は、ご承知のように大学改革などで学部定員が減っています。入学者が減っていますが、倍率や受験率などは一定です。特に、合格した人が入学する入学率は、ほぼ一定になっています。

国公私立大別入学者の選抜区分別割合の推移

図⑤

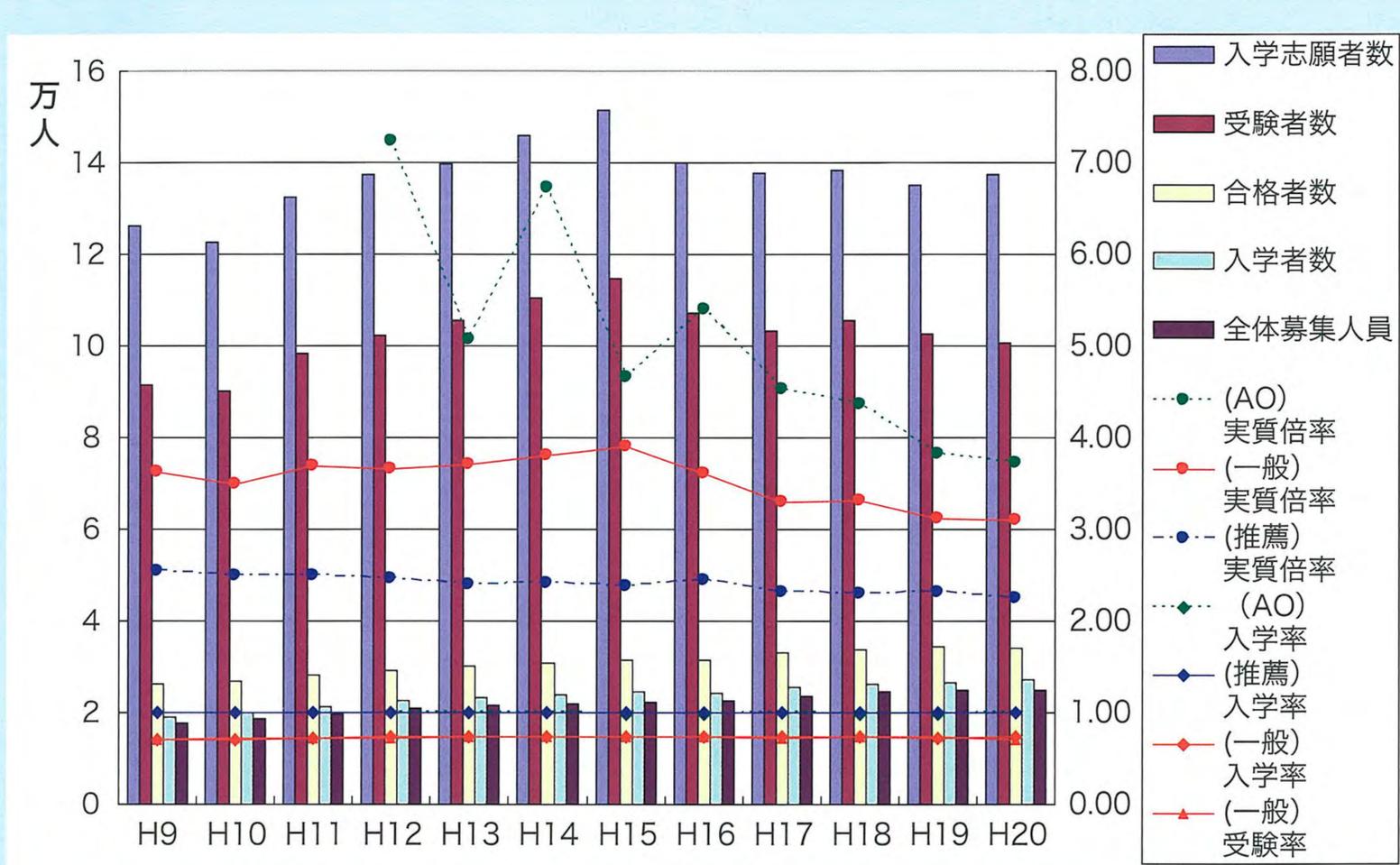


国立大学：定員減少、入学者減少、諸比率一定

図⑦は公立大学の状況です。公立大学は、新設大学や新設学部が増えています。入学者も増えていますが、定員が増えていますので倍率としては低下しています。ただ、入学率など基本的なところは、ほぼ一定

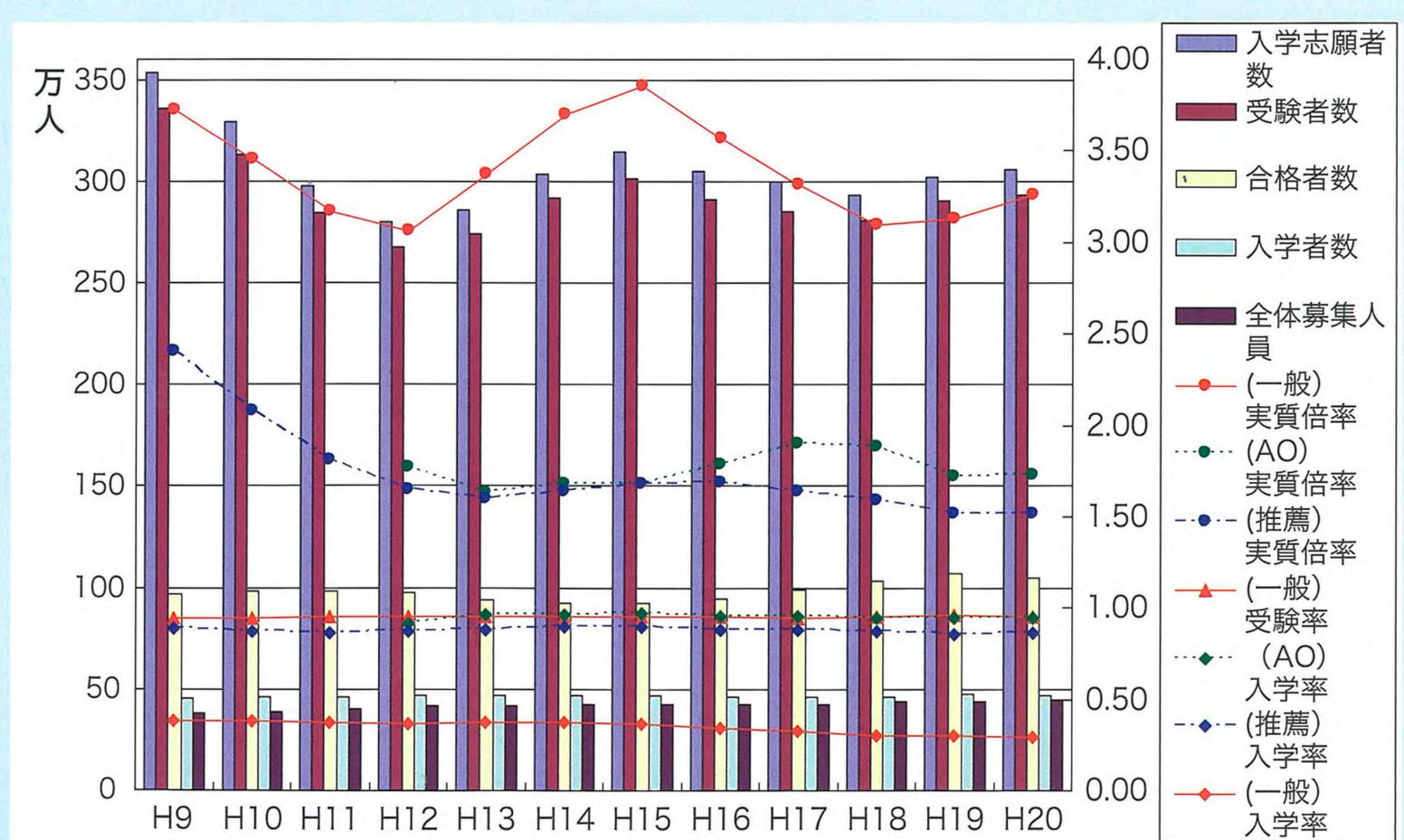
になっています。

一番大きな変化は、図⑧の私立大学です。定員増があったのですが、入学者は一定なので、だんだん入学率などが減ってきています。特にご注目いただきたい



図⑦

公立大学：定員増、入学者増、倍率低下



図⑧

私立大学：定員増、入学者一定、諸比率変動

のは、AO入試の入学率で95%ぐらいなのです。ところが、推薦入試の入学率は意外に低くて、90%に届かず85%ぐらいなのです。これに対して、国立大学、公立大学では、ほぼ100%になっています。

ということで、図⑨のように、国公立では入学率も高く充足率も落ち着いているのに対し、私立大学では受験率が非常に高くなっています。これは、何校でも受けられるので高いのですが、余裕率が随分高くなっています。実倍率は国公立とあまり変わらないのですが、一般入試の入学率が極めて低くなっており、充足率が、それでもまだ足りないという状況になっています。なお、国公立で受験率が0.7前後と低いのは、ご承知のように後期日程を前期入学者が受けても無効だという抑制が掛かっているということです。

こうしてみると、日本の大学入試というのは国公立と私立で全く違うということが出来ます。私立大学では一般入試が減り、推薦入試は、安定から減少傾向に、AO入試は一時急速に増加したものの停滞ないし減少傾向に転ずるかかどうかというところでしょう。

■AO入試と推薦入学の違い

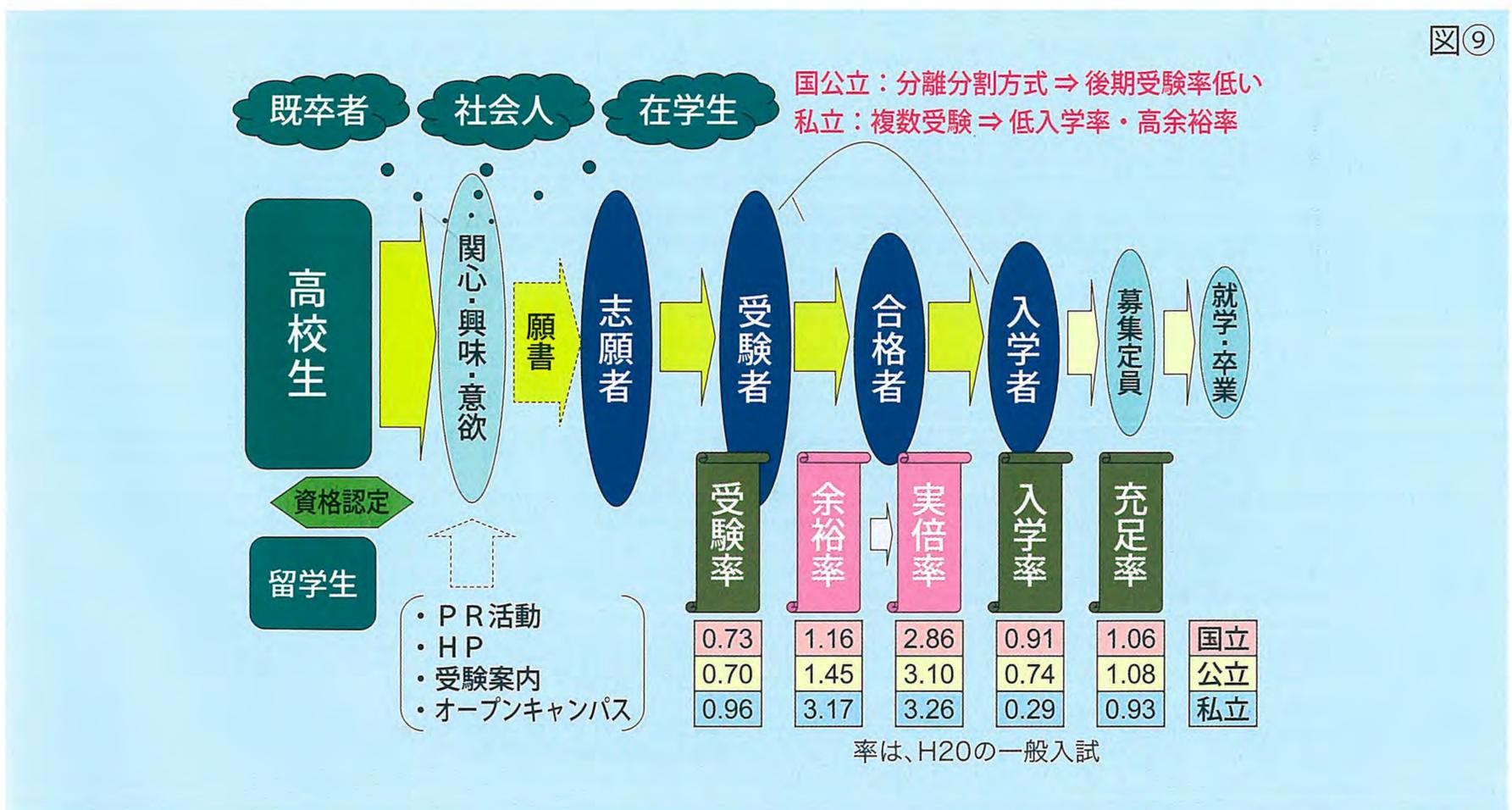
時間が大分経過しましたがけれども、わたしが最初に申しましたように、AO入試と推薦入試はどこが違うのか、わたしにはいまだによく分からない「日本型選

抜」であります。形の上からすると、推薦入学は高等学校からの推薦書を選抜資料として本人に面接あるいは小論文を課す。その資質を確認し、入学を許可する。これは、国立大学協会のもので、もうちょっと文章としては長いのですが、高・大接続そのものなのですね。

前の大学入試室長の先崎さんが見つめてきたのですが、1910年に旧制高校に特別枠の無試験検定というのがあったそうでした、これが日本における推薦入試の初めではないかということです。芥川龍之介などはこれで合格したといいますが、本当かどうかは分かりませんが、多分、本当だと思います。

推薦入学について明確に記載され始めたのは昭和42年(1967年)、ちょうどベビーブーマーが入学したところで、文科省の大学入試選抜要項に記載されています。99年には定員の3割までを5割までに緩和しましたがけれども、国立大学は、その後もなかなか3割というのを撤廃しないで、AO入試と合わせて定員の5割までに緩和したのが2008年です。現在、私立では99.5%、大部分の大学で推薦入試というものが行われています。

推薦入試は、高校生の生活を評価する、学習の成果と校長の推薦を主として選抜を行うということで、必要な書類の提供等、高校側の協力を求めるという仕組み



です。これがうまくいけば、高大接続や高大連携が円滑に進むでしょうけれども、実態としては、調査書の評定平均の数値を要件としていないというのが半分ぐらいあります。

また、実際にどのような選抜をしているかをみると、面接だけ、小論文ということで、学力検査は2割強。実施学部の約5割で基礎学力の担保に課題を感じています。

図⑩は、国立大の一般選抜、推薦入学、AO入試の

外形的といいますか、表面的な定義です。一番違うところは、一般選抜は推薦が要らない、推薦入学は当然のことながら1人1推薦限定、AO入試は、そのような意味では自己推薦といいますか、自己出願というのが特徴だと思います。入学義務は一般選抜では制約がありませんが、推薦ではありますし、AOもかなりきつい制約を一応、道義的には掛けています。

一般選抜については、国立大学協会が取りまとめ

図⑩

国立大AO・推薦入試の外形的定義

	一般選抜	推薦入学	AO入試
受験資格	高校卒業	ほとんど現役のみ	現役とは限らない
推薦	不要	学校長による1人1推薦	受験生の自己出願
定員比	前期後期	5割まで	推薦と併せて5割未満
入学義務	制約なし	あり	課す場合は大学の責任で
実施時期	2・3月	11月以降に募集・実施	特に規定なし
指定校等	なし	大学によって異なる	大学によって異なる
センター試験	課す	課す／課さない	課す／課さない
選抜方法	学力検査	小論文、面接など	他に、面談、講義とか多様

国大協が取りまとめ、入試センターを介して実施

国大協と高等学校校長会との取り決めによる

特に制限がない選抜で、全ては実施大学の責任で

2010年からガイドライン8月以降

図⑪

国立大AO・推薦入試の主観的定義

	一般選抜	推薦入学	AO入試
特徴	選抜試験	高大連携選抜	特区入試
性状	一発勝負	学校長による1人1推薦	受験生の自己売り込み
学生主体性	自主中立	弱・受動的	強・能動的
入学義務	なし	あり	課す場合は大学の責任で
実施時期	前期・後期	11月以降に募集・実施	特に規定なし
指定校等	なし	大学による(地域枠等)	大学によって異なる
透明・公開性	高い	学部教授会	アドミッションセンター
入学後教育	一般的	一般的	特別教育システムと連動も

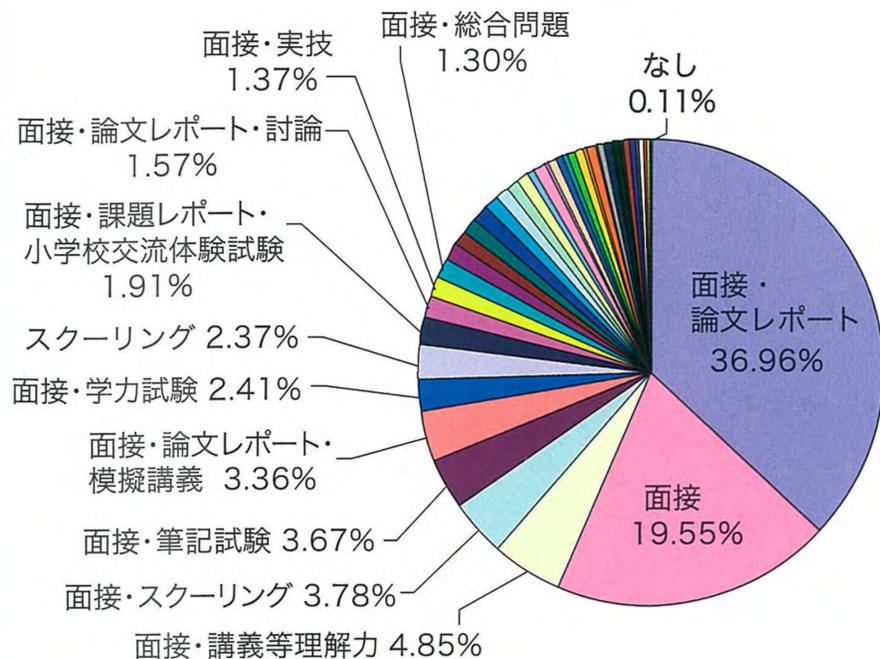
特に制限がない選抜特区、全ては実施大学の責任で

2010年からガイドライン8月以降

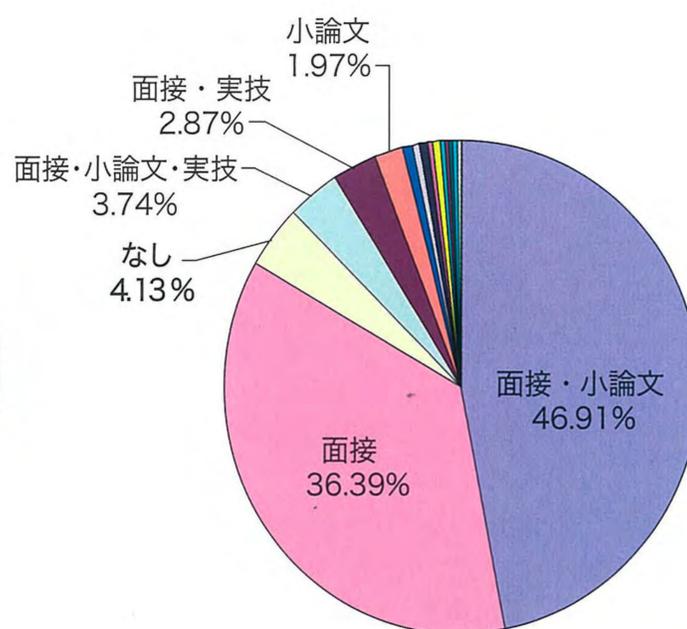
国立大学の推薦・AO入試選考内容

(北海道大学 佐々木 隆生教授の調査資料)

AO入試 選考内容別 募集人員



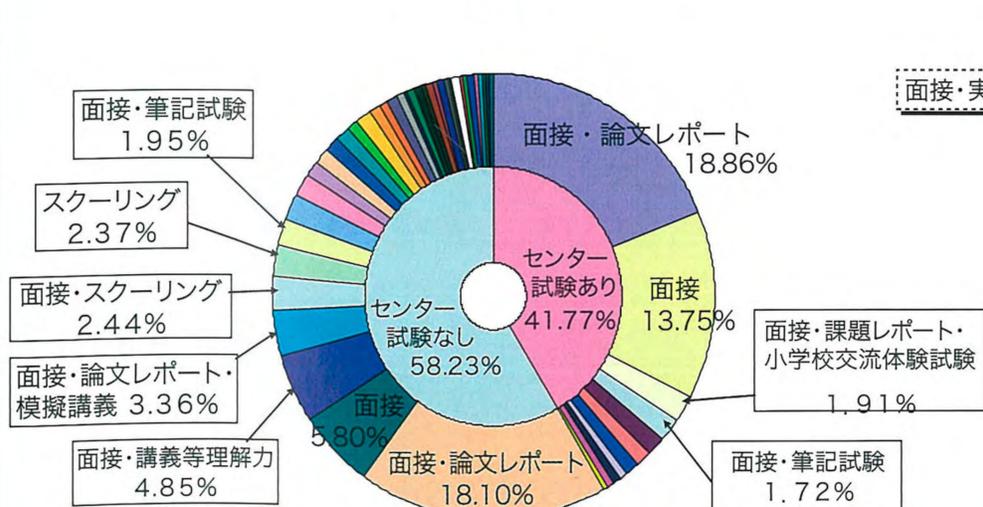
推薦入試 選抜内容別 募集人員



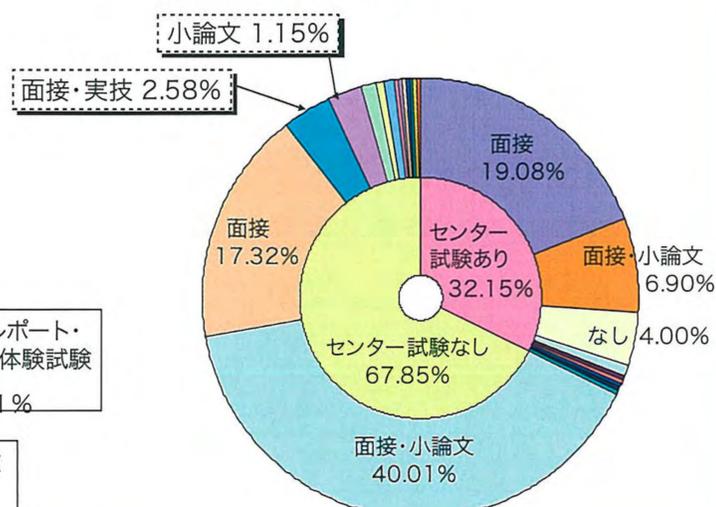
国立大学の推薦・AO入試センター試験利用状況

(北海道大学 佐々木 隆生教授の調査資料)

AO入試 センター試験×選考内容別 募集人員



推薦入試 センター試験×選考内容別 募集人員



	国立AO	国立推薦
センター試験利用	41.77%	32.15%
面接のみ	5.80%	17.32%

て大学入試センターを介して実施していますし、推薦入学は高等学校長協会との取り決めというのが以前から続いているようです。

いっぽうAO入試については、特に制限がありません。全てを実施大学の責任で行うということで、高等学校側からは、AO入試というのは非常に扱いにくい入試であるというようなコメントが来ております。

図⑪は、国立大入試を主観的な定義としてまとめたものです。一般選抜は選抜試験、推薦入学というのは高・大連携で選んでいます。AO入試というのは特区入試のようなもので、ある意味では、かなりチャレンジできること、何でもありというところがあります。世情は、一般選抜がよく言われるとおり一発勝負。推薦は1人1推薦限定ですけれども、AO入試は受験生の自己売り込みというのが非常に強いことでしょう。受験生の主体性としては、AO入試が非常に能動的で、推薦入学は受動的であるという違いがあります。入学後の教育については、AO入試は特別教育システムやさまざまなマッチングプログラムなどと連動した選抜が可能になるということもあります。

透明性・公開性というのは、一般入試は1点刻みの点数ですから非常に高いと考えられます。推薦入学は学部教授会の専権事項ですのでコメントを差し控えますが、AO入試については、アドミッション・センターで実施することによって透明性・公平性・平等性が担保されているわけです。

AO入試の性格は、多面的・総合的な学力判定というわけですが、実態としては、書かれているアドミッション・ポリシーが抽象的だということもあって、私立大学ではほとんどが面接だけで、学力検査などはおやりになっておられない。その結果として、実施学部の約7割で基礎学力の担保に課題を感じると言われています。さらには、実施学部の5割でスタッフの過重な負担というのが問題になっています。これが、今後、問題になるのではないかと思います。

図⑫は、北海道大学のもうお辞めになりましたけれども佐々木先生が悉皆調査されたものです。この中で注目していただきたいのは、面接だけで選んでいるのはAOで20%、推薦で36%ぐらいある。

センター試験の利用状況については、利用している

大学はAO入試で約40%、推薦入学では32%とあまり利用されていないようです。

日本では、個別大学での選抜過程を非常に重視しておりますけれども、イギリスへ再度行って調べてお聞きしたところ、イギリスにはUCASという全国的な選抜組織があって、レベルAを取れば合格させますという条件の出し方をしています。だから日本の社会で許されれば、場合によっては、そのような条件付きの入学許可というのがAO入試でも結構有効なのではないかなと考えております。

どうやら、一般入試はさて置き、国公立大学と私立大学で大きく違うのは、この推薦・AO入試のところなのです。私立大学では、この二つの入試で5割を超えているわけで、実施大学も結構多いわけです。

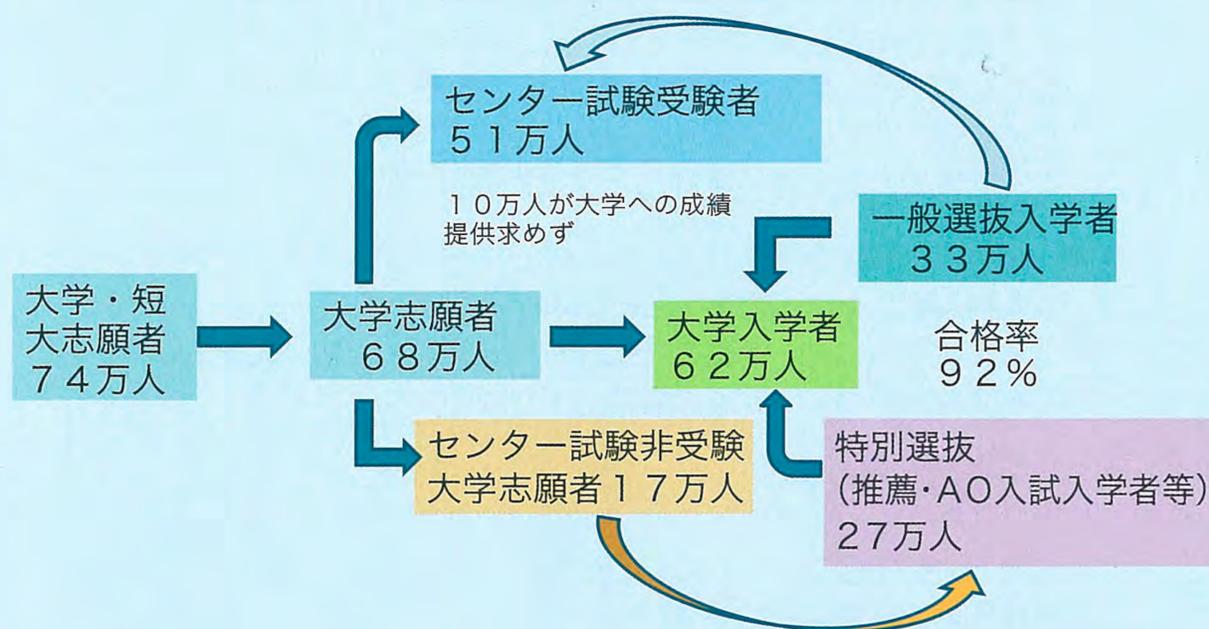
推薦とAOの二つでどこが違うか見てみますと、私立大では入学率がえらく違います。AO入試は9割5分ぐらいですが、推薦入試は驚くことに8割6分ということで、なぜか私立の推薦入試の入学率というのは、あまり高くないのです。それが、AO入試を積極的に早い時期からやるというインセンティブになっているのかもしれませんが。これに対し国立大学では、ご承知のように入学率は100%に近いわけですね。このような点が、推薦・AOとも私立大学と国公立大学で随分と違うところです。

このような欠点を補うために、以前、アドミッション・ポリシーを明確化していただきたいという中教審の答申があり、各大学でもこれに沿って検討されていると思います。それから、学力把握もきちんとやっていただきたいということもあります。確かこれを決めるときは、座長がわたしだったのですけれども、当然のことを当然に決めさせていただいたのです。わたしは、大学入試センターで禄を食んだから言うわけではないのですけれども、センター試験というのを、もうちょっとご利用になったらいいと思っています。あれは、作るのも実施するのも大変なのですね。

個人情報等について理由はよく分からないのですけれども、センター試験を受けている方が51万人いるのですが、10万人が最終的には成績提供を求めているのです。請求件数が140万ぐらいあるのですけれども、10万人ぐらいの方は、もうどこかに片付

図⑬

センター試験受験者の多様化



(大学入試センター：荒井克弘教授 作成資料)

いていて、そちらのほうに行っているのかもしれませんが [図⑬]。

それから、センター試験をそもそも受けていない方が17万人ぐらいいます。だから、この10万人と17万人を合わせたらちょうど27万人なのですね。ちょっとうまく出来過ぎていますがけれども、そのようなことで、センター試験の受験生のその後の動向というのをもっと分析したら、いろいろなことが分かるのではと思っています。

AO入試の実施のルールというのは、これは8月1日以降とするという具合に決めておりますけれども、高等学校の先生方にお聞きしますと「エントリーシートというのがあがあるが、あれには制限が無い。6月ぐらいから出させて囲い込みをしているのが実態である」とも言われましたが、国立大学ではそのようなことはやっていないとお答えしておきました。入学前教育はAO入試だけでなく、推薦や一般入試の合格者にもやらなければならない状況だと思っています。

■新たな入学者選抜システムの構築に向けて

現在、大学は七つぐらいに機能分化されていますが、一般には、研究重視、大学院の教育を重視しているというのが国立大学の傾向でございます、その結果と

して学部教育敬遠の風潮があるとも言われます。それから、非常に入試業務の負担が大きい。入試の種類が10種類ぐらいで大変な負担になっているので、これを何とかしなければいけない。

分離・分割方式の課題としては、スケジュールが随分タイトであるし、昨年のような震災などがあると、緊急事態の対応というのもスケジュールのタイトさに応じて大変です。だから、アドミッション・センターの職員・教員の方々は大いに負担になるわけです。

学力担保とその保障のシステムとして、高大接続テストというのが提起されております。また、最近では、東京大学などで秋季入学というのが議論になっております。このようなことがあります、入学者選抜制度全体の改編の可能性があるようですが、推進しておられる東京大学の鈴木（敏之）副理事にお尋ねしたら、全く入試のことは考えていなかったそうでございまして、今後、議論になると思います。

そのようなことで、高・大接続テストの検討というのが進められております。これは、当初、わたしが立ち会っているところでは、国立大学協会の入試委員会で新たな仕組みを作ってはどうかという話がありました。平成17年には、大学入試センターの中での改善懇談会で、センター試験とは全く別物としてそのようなものがあるのもいいのではないかという議論も

新たな入学者選抜システムの模索

- 社会変動に対応できるシステム
新たな地球的な課題 環境・資源・人口・格差
産業構造の変動：高度経済成長から成熟・情報化社会へ
社会構造の変動：少子高齢化・福祉社会
- 統一試験システムの限界
○大学入試センター試験：全国同時間帯・同一問題
○国立大学の分離・分割方式：同時期・志願・合格・入学
突発的緊急事態に対する脆弱性
- 大学入学諸制度の制約
国公立：私立：二制度分立
試験・入学時期の制約：ガイドライン
定員管理の規制：補助金規制
- 新たなシステム構築への展望：日本独特の入試文化 変わりうるか

ありました。

文部科学省でも、大学入学者選抜方法改善協議の場では平成18年ぐらいから議論になっておりまして、そのようなものを受けて中央教育審議会の大学分科会で高等学校と大学との接続に関するワーキンググループというのが設置されております。また、これとは別に、東海大学の松本亮三先生などがやっておられますけれども、私立大学協会も随分と危機感を持っておられまして、学力保障についての課題と提言というのを平成20年に出しておられます。

高大接続テストについては、文部科学省の先導的の大学改革推進委託事業で「学力を客観的に把握・活用できる新たな仕組みに関する調査研究」を北海道大学の佐々木先生を中心に、国公立の大学関係者、高校、PTA、有識者の方々が集まって、海外の調査なども進めていろいろ調べておられます。この件につきましては、ここでは省かせていただきますが、あくまでも学力の到達度評価テストであって、選抜のための集団準拠型テスト、コンテストではない、コンクールではないということです。達成度測定のための絶対評価ができるというスペックです。

基礎的な学習に立脚した基本的な問題、類似問題が繰り返し出題される。それから、選択出題範囲等々がかなり限定されている。「イメージ的に一番近いのは、ドライバーライセンスのペーパーテストみたいなもの

ですね」と言ったら、佐々木先生にムッとされましたが、そのようなものかもしれません。

それから、大学入試センター試験とは目的・背景が違うのだということです。素点主義ではなくて、ある程度、標準化したもので、五月雨的な実施も可能だということです。その根拠となるのはIRT、アイテム・レスポンス・セオリーに準拠したもので、一貫性・比較可能性があるというのですが、IRTというのは単なる信仰だとおっしゃっておられる方々もおられまして、なかなか素人目には難しいと思います。結果的に、それがうまく運営されれば、高等学校・大学の教育改革に資する、緊急事態にも対応できるシステムになるわけです。

今後の展開というのは、よく分からないのですが、参考書籍としては非常に刺激的なタイトルですけれども『大学入試の終焉』（北海道大学出版会）を佐々木先生が憤激を持って書いておられますので、お読みいただければと思います。

■まとめ

ということで、もうそろそろまとめなければいけないのですが、[図⑭]は新たな入学者選抜システムの模索です。皆様方は重々ご承知だと思いますが、日本における大学入試、高校入試もそうかもしれないのですが、これは、かなりではなくて極めて特異なガラパ

国立大学AO入試の将来像

日本型AO入試は、**特区入試**として、格別の自由度を享受してきた。今後は、「大学全入時代」、少子化、高校多様化に如何に対応するか。

現状のままでは、学力担保などに手間がかかる、

- ① 国立大学では、少数精鋭の特区選抜として、入学後の特別教育プログラムと連携した選抜や学部教育システムとも連動した入試教育改革をすすめる。

将来、

- ② 「学力担保・保障システム」として、「**高大接続テスト**」などが、新たに導入されるなら、国立大学におけるAO入試の拡大普及をふくめた入試制度全体の改編が起こりうる。

ご清聴有難うございました。

ゴス、世界に類の無いシステムですね。これが今まで非常にうまく、効率的に運営されていたところ、最初に申しましたように、21世紀の知識基盤型のフロントランナーとしての役割を求められる日本で将来にわたって適用できるシステムかというのは、再度考える必要があります。そのような社会変動に対応できる選抜システムにはいろいろなものがありますので、新たな課題がたくさん出てきているわけですから、西洋から単に知識を流入して、それを応用すればいいという時代は過ぎています。

もう一つは、統一試験システムの限界です。数分遅れても怒られるような大学入試センター試験が、全国で、同一問題で実施されるというのも限界に来ているのではないのでしょうか。国立大学の分離・分割方式も同じです。同時期に非常にタイトな日程でやる、緊急突発事態が起こるとかなり脆いシステムになっております。

さらには、大学制度あるいは日本の学校教育制度の制約というのもあります。私立と国公立で2制度が分立したような格好になっております。これは、国大協などでは指摘されていますが、試験や入学時期の制約というのがありまして、ガイドラインが決められております。諸外国と違うのは、定員管理というのがかなり厳しくて、新たなシステムへの展望というのを思い切ってやる気運がそのうち出てくる

かもしれない。日本独特の入試文化が今後変わり得るかどうかだと思います。

最後に、国立大学AO入試の将来像なのですけれども [図⑮]、現状では2,000人ぐらいの定員なので、ある意味、特区入試として格別な自由度を享受してきた、非常に独自性を持って各大学でおやりになっておられます。今後は少子化の中で、更に工夫していく必要があると思います。現状のままでは、学力担保などに非常に手間がかかり、負担も大きいわけですね。

国立大学のAO入試は少数精鋭の特区選抜として行われている、あるいは特別教育プログラムと連携したパイロットスタディーの一環として、選抜と学部教育システムと連動した教育改革を進めるために行われている、といった性格が強いと思います。

わたしも関わっていたものとして、一応、AO入試がいいものだという前提でお話ししましたが、将来的に入学者選抜の新たな仕組みが導入されることになれば、国立大学におけるAO選抜や一般選抜、学力検査以外への拡大を含めた入試制度全体の改善が起こり得るのではないかと期待している次第でございます。

今後とも国立大学のAO入試というのが一つのモデルとして、将来の日本の大学入学者選抜に対する何か大きな解決策を提示していただければ幸いです。どうも長時間ご清聴ありがとうございました。

キラリと 光る 学生達

「私の履歴書 AO入試編」

『私の履歴書』は、日本経済新聞の朝刊最終面に掲載されている連載読み物で、既に50年以上続いている人気のコラムです。1か月間に1人を取り上げるスタイルで、各界の著名人が、出生から今日に至るまでの半生を描く自伝形式でまとめられています。

ここでは、『私の履歴書』のスタイルで、AO入試で入学した学生達に「受験した理由」「合格するために準備したこと」「入学時に不安に思ったこと」「誇れる成果や活動」「今後の目標」などを語っていただきました。

もちろん、登場する学生や社会人の方々は、半生どころか人生の4半期が過ぎたばかりです。これからの人生がいよいよ本番で、明るい未来だけでなく、さまざまな困難にも遭遇しなければなりません。

しかし、彼らが経験したAO入試というひとつの目標を突破する頑張り、入学後の努力、充実した大学生活は、今後の人生を切り拓いていく上で、大きな力になっていることは間違いありません。ご協力いただいた皆さまの益々のご活躍を祈念しています。

23ページから43ページについては、
肖像権・著作権の都合により掲載して
おりません。

加盟大学の 組織と概要

AO入試の導入・実施状況

加盟大学の各センターが、学内でどのような位置づけになっているのか、機構・組織図と役割、活動内容などを大学別にまとめました。あわせて、AO入試を実施している大学については、いつ、どの学部で導入したのか、あるいは取り止めたのか、時系列で一覧にまとめました。



なお、「AO入試の導入・実施状況」については、特記事項がない限り、以下のような表記でまとめています。

- ◎：センター試験を「課さない」AO入試を導入
- ：センター試験を「課す」AO入試を導入
- ◎→○：センター試験を課さないAOから課すAOに変更
- ：AO入試を取り止め
- 般：一般枠（とくに枠を設けていない）
- 専：専門枠（専門高校を対象）

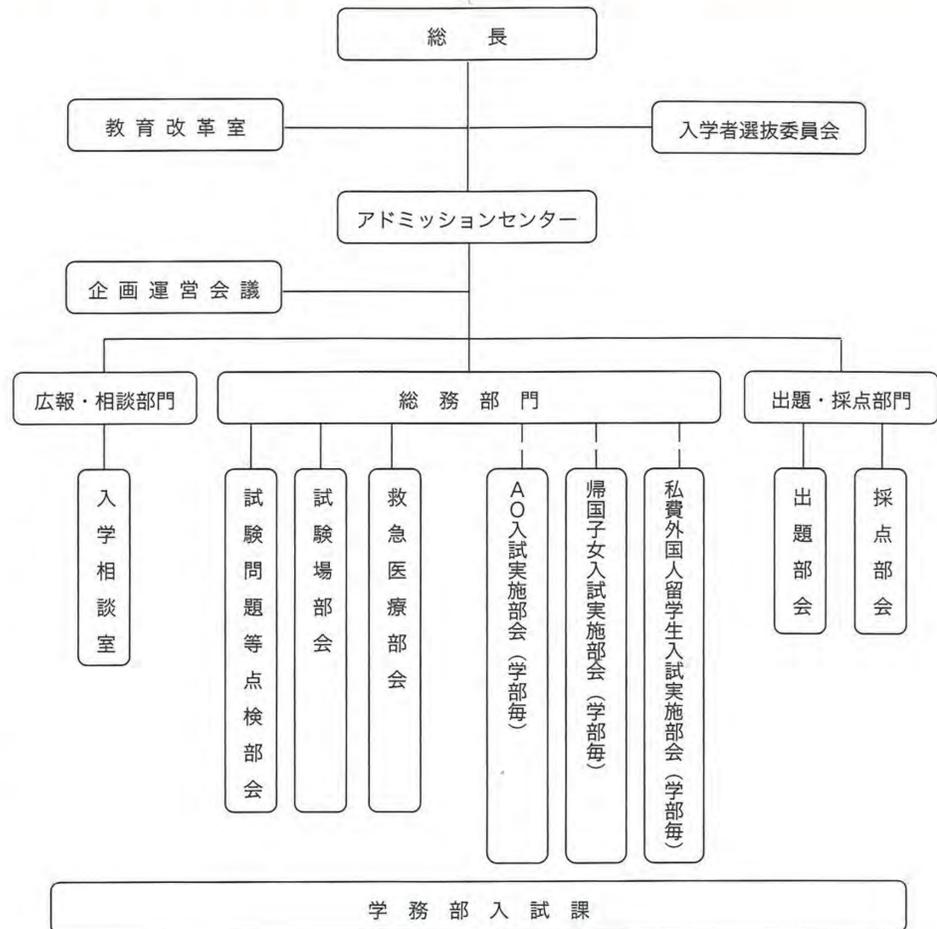
組織図・活動内容などについて

北海道大学では、入学者選抜方法の改善及び入学者選抜の円滑な実施を目的に「北海道大学アドミッションセンター」を平成17年に設置し、入学者選抜にかかわる組織を一元化しました。

アドミッションセンターは、センター長に副学長を充て、総務部門、出題・採点部門及び広報・相談部門により構成され、各部門にはそれぞれ専門部会を設置しています。

総務部門は、試験実施に係る総括及び連絡調整に関することなどを、出題・採点部門は、入試問題の作成及び採点に係る基本方針の策定に関することなどを、広報・相談部門は、入学志願者等に対する広報や入学相談に関することなどを主たる業務としています。

アドミッションセンターの設置によって入試組織を一元化した結果、業務の諸機能は有機的に関連するようになり、全学の協力体制の円滑化を実現しました。



A O入試の導入・実施状況

		H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25
文学部		未実施												
教育学部			◎									●		
法学部		未実施												
経済学部		◎										●		
理学部	数学科						◎					●		
	物理学科						◎							
	化学科	◎												
	生物科学科			◎										●
	地球惑星科学科	◎												
医学部	医学系											○		
	保健学系											○		
歯学部		◎												
薬学部		◎										●		
工学部 (応用理工系)			◎				◎→○							
農学部	農業工学科		◎									●		
	農業経済学科						○					●		
獣医学部		未実施												
水産学部		◎												

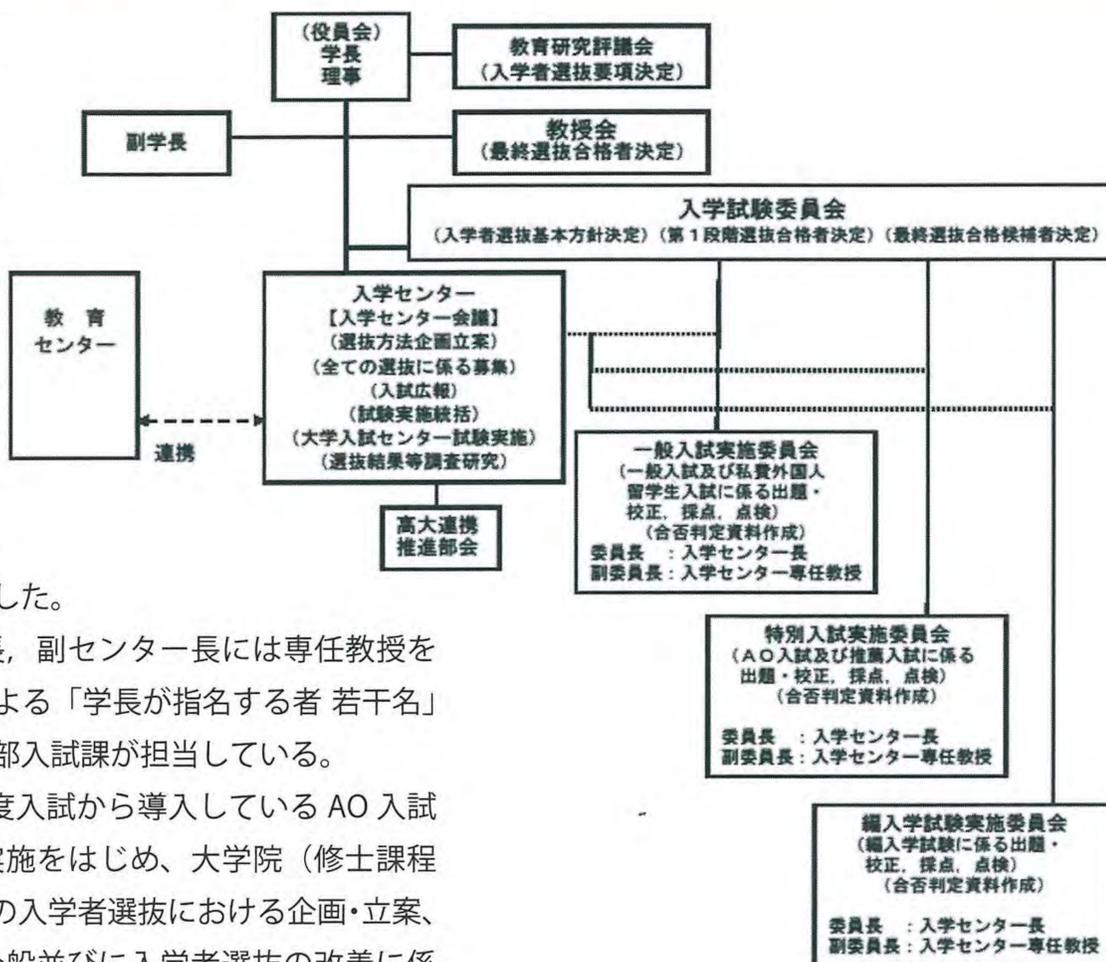
- ※ 理学部生物科学科は、生物学専修分野で実施。
- ※ 医学部保健学系は、看護学専攻及び作業療法学専攻で実施。
- ※ 工学部応用理工系は、応用マテリアル工学コースで実施。

組織図・活動内容などについて

本学の入学センターの前身はアドミッションセンターである。アドミッションセンターは、アドミッション・オフィス方式による入学者選抜入試（AO入試）の円滑な実施を図り、入試に関する総合的な広報活動及び入学者選抜の改善に係る調査・研究を行うこと等を目的とし、専任教官2名から成る本学初の学内共同教育研究施設として平成14年4月に設置された。平成16年4月、国立大学の法人化と同時に改組して入学センターとした。

入学センター長には入試担当副学長，副センター長には専任教授を配置し、この両名と、センター規程による「学長が指名する者 若干名」とで構成し、センターの事務は、教務部入試課が担当している。

入学センターの業務は、平成14年度入試から導入しているAO入試にかかる企画・立案、学生募集及び実施をはじめ、大学院（修士課程及び博士課程）入試を除いた学部全ての入学者選抜における企画・立案、および大学説明会等の入試広報活動全般並びに入学者選抜の改善に係る調査・研究、分析及び評価等である。



AO入試の導入・実施状況

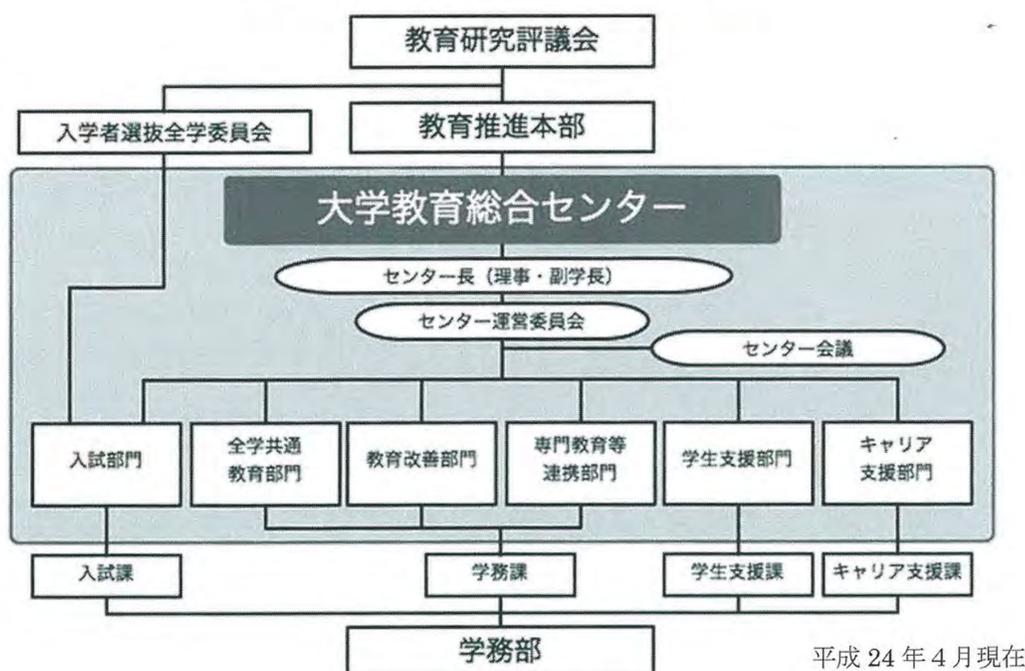
	医学部 医学科	医学部 看護学科	備考
平成14年 2002年	◎般	◎般	医学科入学定員10名／看護学科同6名(入学定員の1割) 高校調査書評定平均4.0以上 面接、小論文
平成15年 2003年			
平成16年 2004年			
平成17年 2005年			
平成18年 2006年			医学科20名／看護学科10名(推薦入試(医10名、看6名、評定平均4.3以上)と一体化) 評定平均4.3以上 面接、課題論文、適性能力検査
平成19年 2007年			
平成20年 2008年			
平成21年 2009年	○般	●般	医学科入学定員を35名に増員(北海道地域枠に変更) 評定平均4.0 センター試験得点率80%以上 面接、課題論文 看護学科AO入試→推薦入試に変更
平成22年 2010年			医学科入学定員を40名に増員
平成23年 2011年			センター試験得点率75%以上
平成24年 2012年			
平成25年 2013年			

組織図・活動内容などについて

【設置年月】 大学教育センター（平成 16.4 設置）
 大学教育総合センター（平成 18.4 再編）
 【所在地】 岩手県盛岡市上田 3 丁目 1 8 - 3 4
 【構成員数】 部門長 1 名
 専任教員 1 名、兼務教員 4 名

【活動状況】
 岩手大学大学教育総合センター入試部門は平成 18 年 4 月に誕生した新しい組織です。本学のアドミッションポリシー（入学者受け入れ方針）に基づき、多様化する学生個々の能力を引き出すための入学試験のあり方について調査研究並びに運営実施を行う部門です。合わせて、入学後の教育を担当する部門や修学・生活支援の部門、さらにキャリア支援の部門とも連携して、本センターが目指す“大学の入口から出口まで”の一貫的サポートを分担します。

大学教育総合センター 組織図

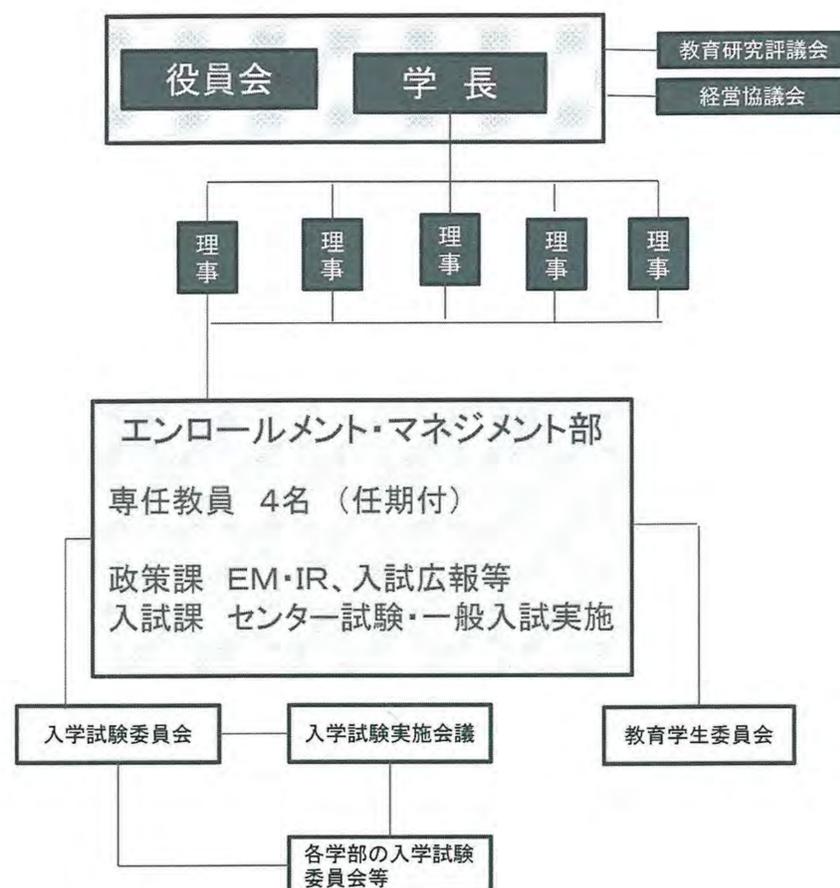


A O入試の導入・実施状況

	人文社会科学部	教育学部	工学部	農学部
平成 20 年 2008 年	◎般 全 4 課程			
平成 21 年 2009 年				
平成 22 年 2010 年				
平成 23 年 2011 年				
平成 24 年 2012 年				
平成 25 年 2013 年				

組織図・活動内容などについて

アドミッションセンターは、入学試験の実施と適切な入学者選抜方法の研究開発及び入学希望者に広報活動を行うセンターであり、平成16年4月に設置されました。平成24年度は、副理事兼センター長1人、専任教員3人、協力教員1人、事務補佐員1人の計6人体制です。アドミッションセンター運営委員会は、アドミッションセンター教員及び各学部入試委員から構成され、入学者選抜に係る企画及び実施、オープンキャンパス・各種入試説明会等の入試広報活動、大学入試センター試験の実施等について審議します。その下には5つのWGが置かれ、①入学者選抜方法WGは入学者選抜方法の在り方とその研究を行い、②入試ミス防止WGは入試の適正な実施方法の検討を行います。③入試広報WGは入試広報の検討を、④AO入試WGはアドミッション・オフィス入試の企画・検討を、⑤大学院入試検討WGは大学院入試の検討を、それぞれ専門的に行います。



山形大学では、EMIRを推進するために、従来あった入試企画室とエンロールメント・マネジメント室を統合しエンロールメント・マネジメント部を創設した。

エンロールメント・マネジメント部に政策課、入試課及び全学的同窓会組織校友会が置かれた。これにより、入試業務と入試広報のみならず、各種調査研究が有機的に図られることとなった。

専任教員4名により、入試・EMIRに加え、GP等の外部資金の獲得等の事業を実施し、入学前から卒業後までの一貫した学生の総合的な情報を分析できる体制を整えた。

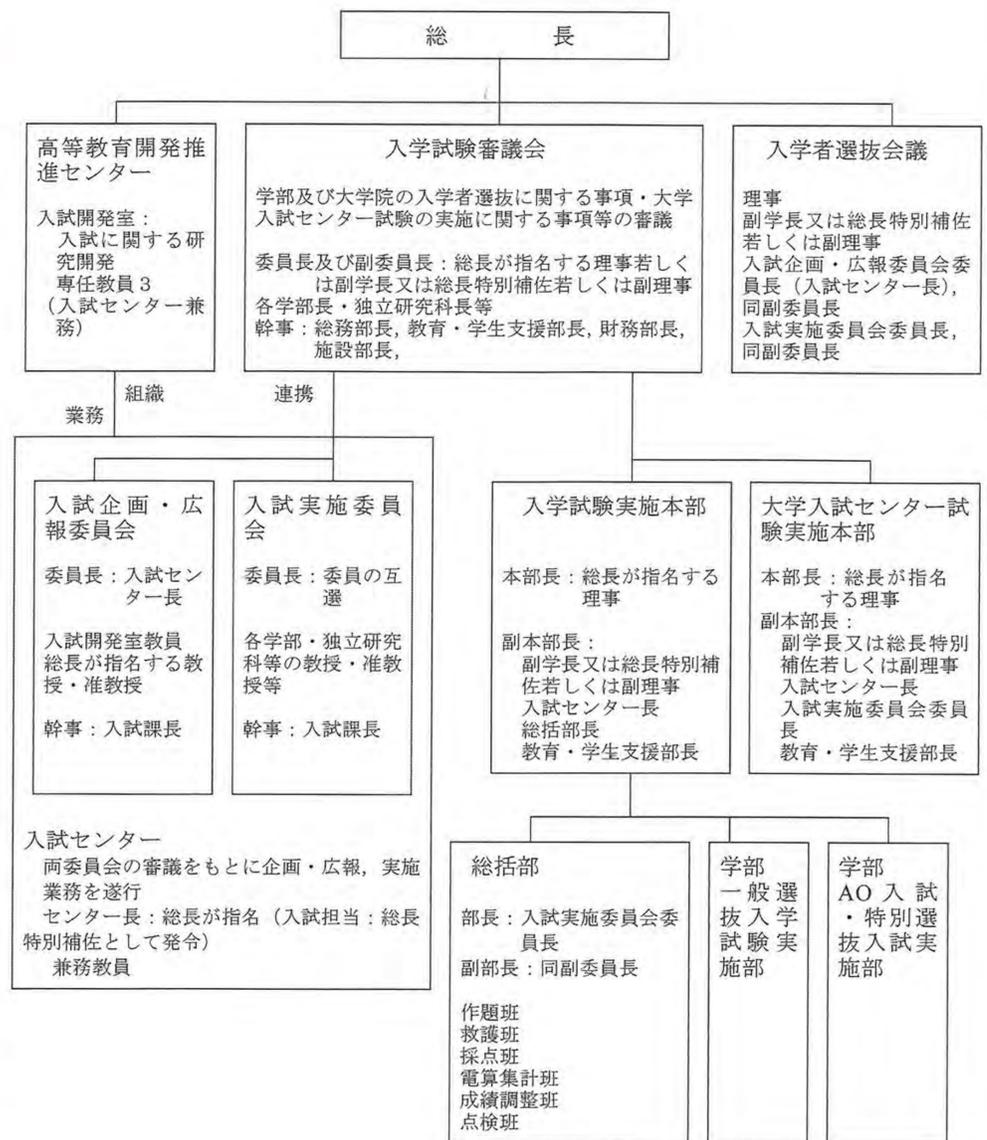
AO入試の導入・実施状況

	人文学部	情報学部	理学部	工学部	工学部	△△学部	○△学部
平成12年 2000年							
平成13年 2001年							
平成14年 2002年							
平成15年 2003年							
平成16年 2004年							
平成17年 2005年							
平成18年 2006年							
平成19年 2007年				◎AO II 昼間 全6学科			
平成20年 2008年							
平成21年 2009年							
平成22年 2010年				◎AO II 昼間 全7学科	◎AO I フレックス 1学科		
平成23年 2011年							

東北大学

組織図・活動内容などについて

東北大学入試センターの前身である東北大学アドミッションセンターは、平成12年度から開始された国立大学のAO入試を担当する部署として平成11年4月に設置された。AO入試と推薦入学などの特別選抜について、研究開発、入試の実施、広報活動を担当した。その後平成16年10月に改組となり、研究開発機能は高等教育開発推進センター高等教育開発部入試開発室へ移り、また入試の企画・広報および実施は平成17年4月に設置された業務組織としての東北大学入試センターの下で行われるようになった。この組織変更とともに、AO入試・推薦入試だけでなく、一般選抜、さらには大学院入試を含めた入試全般を扱うことになった。東北大学入試センターは、全学的な委員会である入試企画・広報委員会、入試実施委員会との連携の下に、入試の中長期的な企画や広報活動、さらには一般選抜、大学入試センター試験、私費外国人留学生入試などの実施を中核的に担っている。各学部が行うAO入試・推薦入試についても全学的な支援体制を組んでいる。



AO入試の導入・実施状況

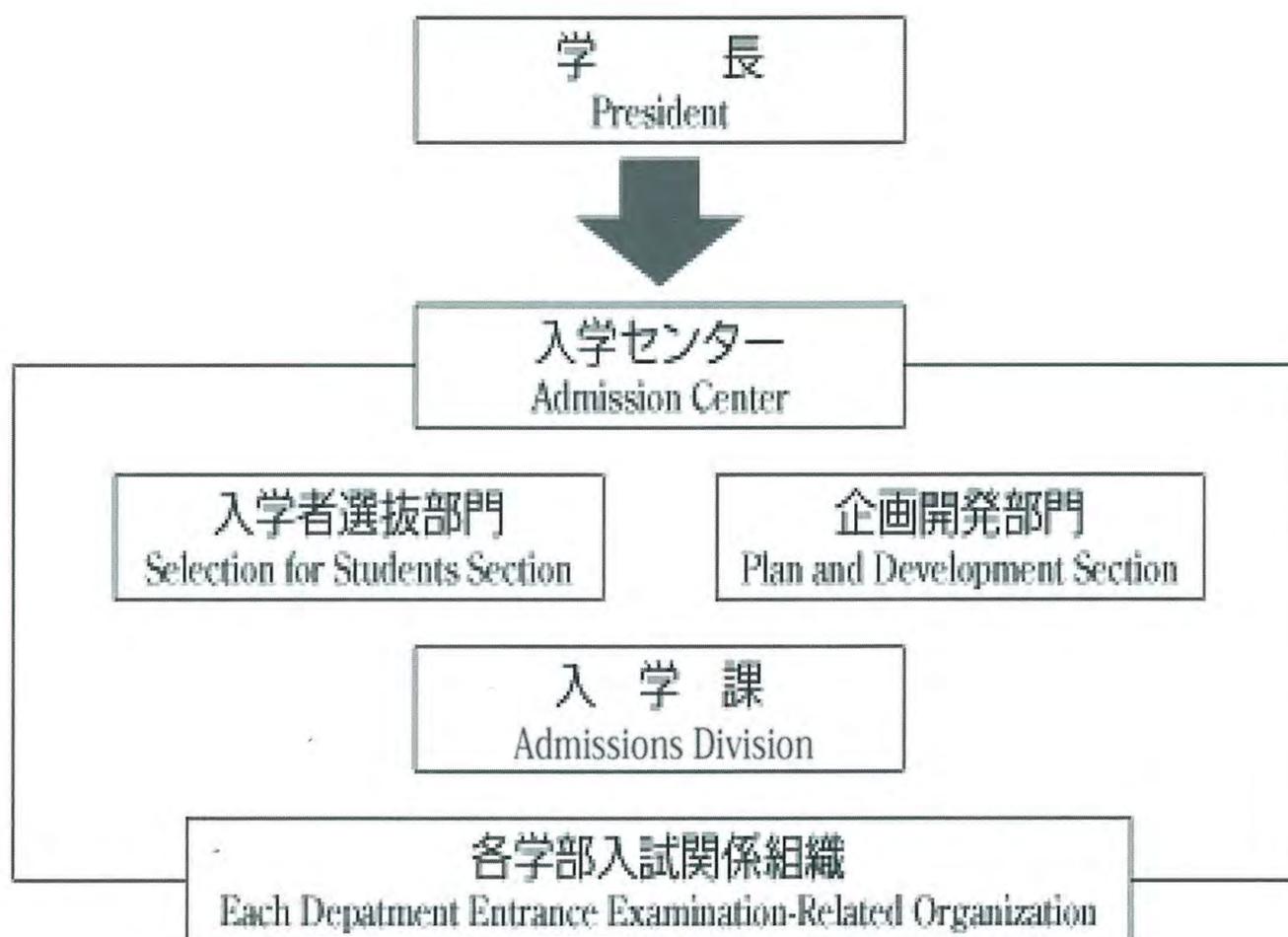
学部	文学	教育	法学	経済	理学	医学		歯学	薬学	工学	農学
						医学	保健				
2000								○般		◎◎ 般	
2001					◎般						
2002											
2003			◎般								
2004											
2005											
2006				○般							
2007						○般					○般
2008		○般					○般		○般		
2009	◎般										
2010			◎→○ 般								
2011											
2012											
2013											

組織図・活動内容などについて

入学センターは、平成18年5月に設置され、茨城大学における長期的入学戦略に基づく入学者選抜の適正な実施及びアドミッション・ポリシーに基づく入学者確保のための方策の策定を行うとともに、入学者選抜方法の改善及び点検評価を目的とする。

入学者選抜部門（各学部から選出された兼務教員各2名：水戸市）は、一般選抜の実施に係る総括及び調整、特別選抜入学試験全般に係る企画・立案及び総括、推薦入学の実施に係る調整、私費外国人留学生特別選抜の実

施に係る調整、社会人特別選抜、帰国子女特別選抜の実施に係る調整などを、企画開発部門（各学部から選出された兼務教員各2名：水戸市）は、入学者選抜方法改善等に関する研究、開発及び研究方針の策定、高校情報及び入試データの調査、分析及び情報処理に関する研究、入学者の追跡調査及び分析、学生募集に関する施策の企画及び立案、学生募集戦略に基づく、学生募集・入試広報活動の推進などを主たる業務としている。



組織図・活動内容などについて

当センターは、アドミッションセンター入学試験を実施するとともに、筑波大学の教育目標に適合した入学者の選抜方法等の調査研究を行うことによって、本学の教育研究の充実発展に寄与することを目的として、平成11年4月に設置された。

この目的に応じて、センターには(1)入学者選抜実施部門、(2)入学者選抜方法等調査研究部門が置かれている。センター運営規則が規定する各部門の主な業務は次のとおり。

入学者選抜実施部門：AC入試の実施計画の企画立案並びに実施に関すること。

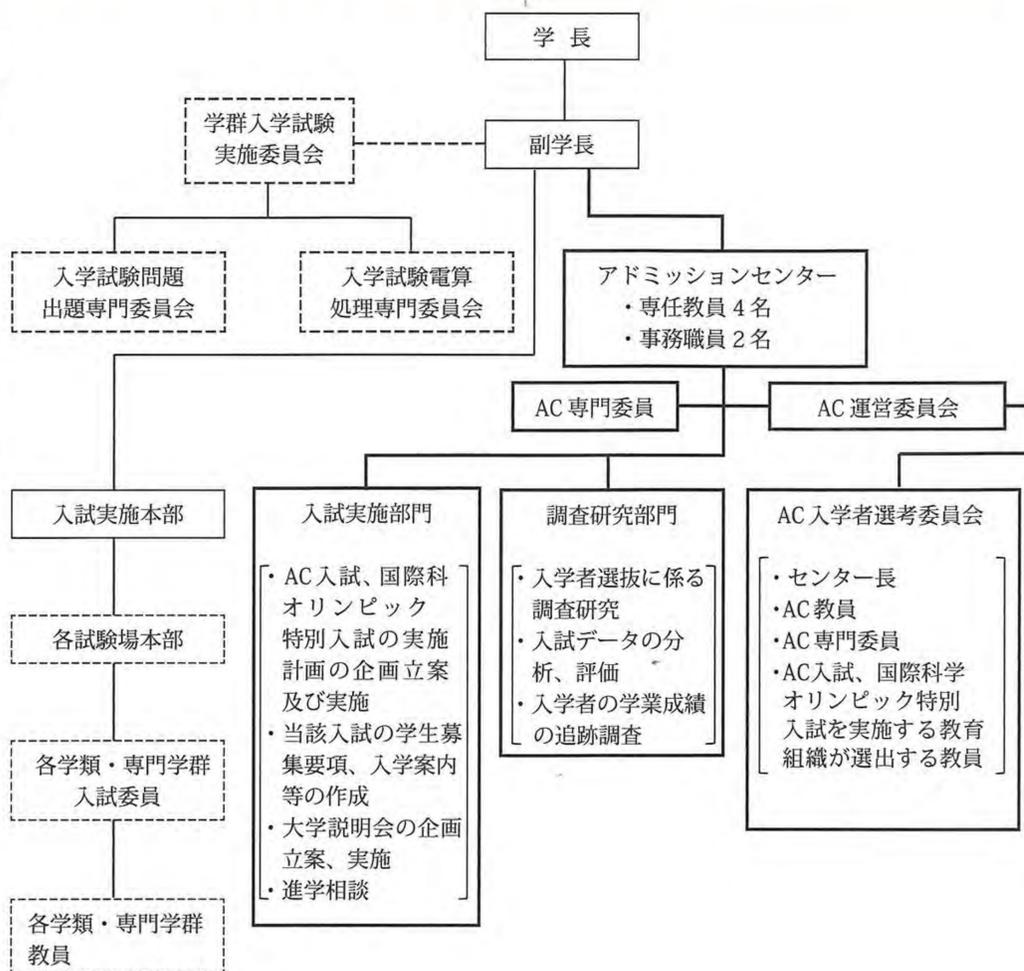
AC入試に係る学生募集要項、入学案内及び各種広報誌の作成に関すること。

大学説明会の企画立案及び実施に関すること。各種進学ガイダンス及び高等学校等における進学相談に関すること。

入学者選抜方法等調査研究部門：入学者選抜方法等に係る調査研究に関すること。

入学試験データの分析・評価に関すること。

入学者の学業成績の追跡調査に関すること。



AO入試の導入・実施状況

	第一学群	第二学群	第三学群	医学 専門 学群	体育 専門 学群	芸術 専門 学群	図書館 情報 専門学群
平成12年 2000年	◎自然		◎社工、国際 工シス ○情報、工基		◎		
平成13年 2001年	◎人文	◎比文、日日 人間、資源 ○生物	○→◎ 情報、工基			◎	
平成14年 2002年							
平成15年 2003年							
平成16年 2004年							
平成17年 2005年							◎
平成18年 2006年							

※自然(自然学類)、人文(人文学類)、
比文(比較文化学類)、日日(日本語・日本文化学類)、
人間(人間学類)、
資源(生物資源学類)、生物(生物学類)、
社工(社会工学類)、国際(国際総合学類)、
工シス(工学システム学類)、
情報(情報学類)、工基(工学基礎学類)
▼図書館情報学群は平成15年度に設置。
▼平成13年度、情報学類・工学基礎学類は、
センター試験を「課す」⇒「課さない」に変更。
▼国際総合学類は、平成13年度まで「8月入学」として
実施。14年度から「4月入学」に変更。

	人文・ 文化 学群	社会・ 国際 学群	人間 学群	生命環境 学群	理工 学群	情報 学群	医 学群	体育 専門 学群	芸術 専門 学群
平成19年 2007年	◎ 全3学類	◎国際	◎教育	◎資源 地球 ○生物	◎ 全6学類	◎ 全3学類		◎	◎
平成20年 2008年				○→◎ 生物					
平成21年 2009年		●国際							
平成22年 2010年									
平成23年 2011年									
平成24年 2012年									
平成25年 2013年			●教育		●応理				

※国際(国際総合学類)、教育(教育学類)、
資源(生物資源学類)、地球(地球学類)、
生物(生物学類)、応理(応用理工学類)
▼平成19、筑波大学は教育組織[学群・学類]の編成を
変更。
▼平成20年度、生物学類は、
センター試験を「課す」⇒「課さない」に変更。

組織図・活動内容などについて



AO入試の導入・実施状況

	福井大学			福井医科大学
	教育地域科学部	工学部		医学部
	AO入試I	AO入試I	AO入試II	
平成13年 2001年		◎専：5学科 (E, A, S, B, H)	○専：3学科 (M, I, P)	
平成14年 2002年		◎専：5学科 (E, A, S, B, H) ◎般：2学科 (M, A)	//	
平成15年 2003年		◎専：5学科 (E, A, S, B, H) ◎般：6学科 (M, E, A, S, B, H)	○専：4学科 (M, I, P, H) ◎般：3学科 (I, P, H)	
	福井大学(統合)			
	教育地域科学部	工学部		医学部
	AO入試I	AO入試I	AO入試II	
平成16年 2004年	◎般：4コース(美術教育サブ、生活科学教育、臨床教育科学、障害児教育)	◎専：5学科 (E, A, S, B, H) ◎般：6学科 (M, E, A, S, B, H)	○専：4学科 (M, I, P, H) ○般：3学科 (I, P, H)	
平成17年 2005年	//	//	○専：3学科 (M, I, P) ●H ○般：2学科 (I, P) ●H	
平成18年 2006年	//	//	//	
平成19年 2007年	//	//	//	
平成20年 2008年	//	//	○専：3学科 (M, I, P) ○般：3学科 (M, I, P)	
平成21年 2009年	//	//	//	
平成22年 2010年	//	◎専：4学科 (E, A, B, H) ◎般：5学科 (M, E, A, B, H)	○専：4学科 (M, I, ◎→○S, P) ○般：4学科 (M, I, ◎→○S, P)	
平成23年 2011年	◎般：3コース(美術教育サブ、臨床教育科学、障害児教育) ●生活科学教育コース	//	//	
平成24年 2012年	//	◎専：4学科 (E, A, B, H) ◎般：4学科 (M, A, B, H)	○専：4学科 (M, I, S, P) ○般：5学科 (M, ◎→○E, I, S, P)	
平成25年 2013年	//	◎専：4学科 (E, A, B, H) ◎般：3学科 (M, A, B) ●H	//	

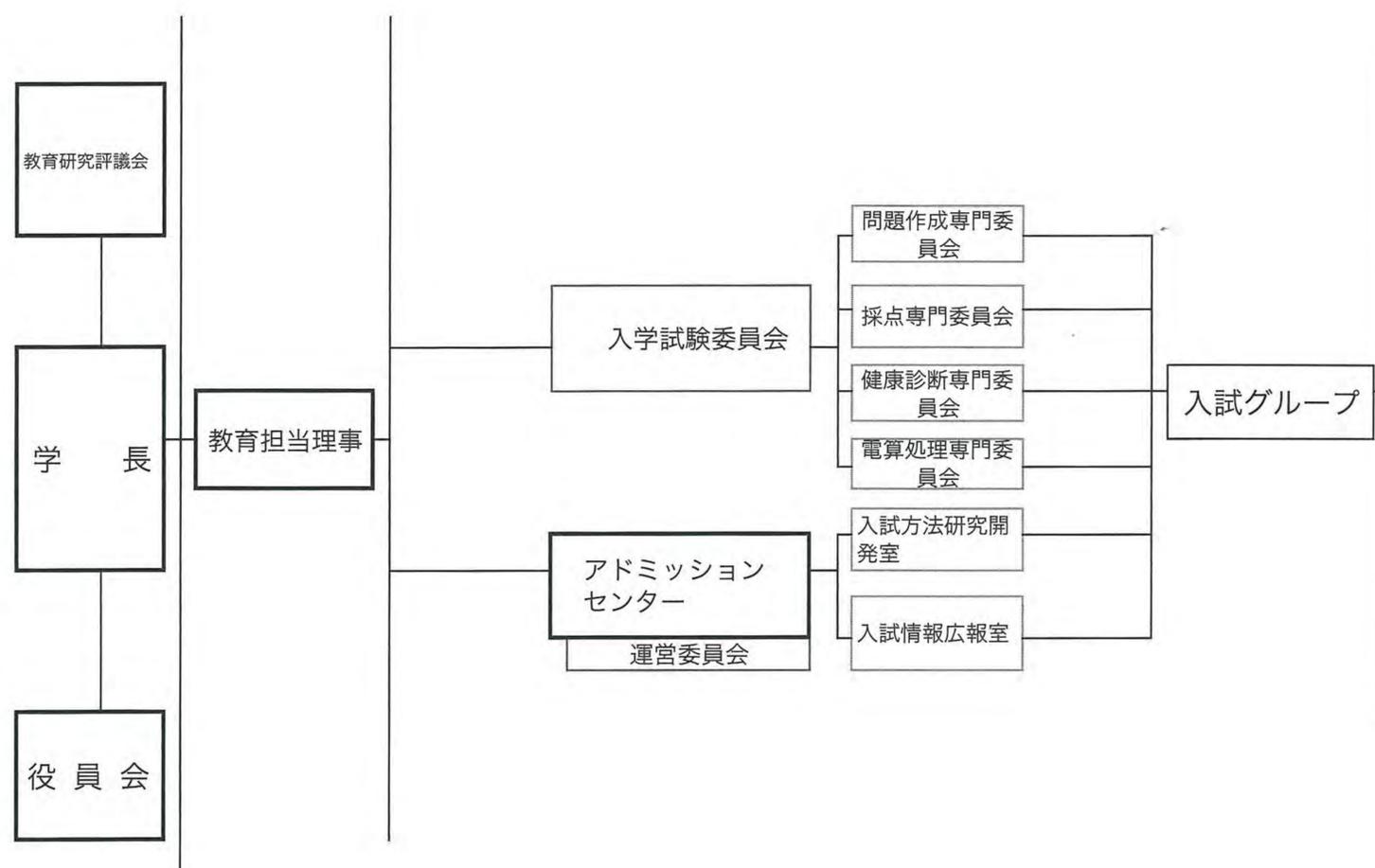
M：機械工学科
B：電気・電子工学科
I：情報・メディア工学科
A：建築建設工学科
S：材料開発工学科
P：生物応用化学科
B：物理工学科
H：知能システム工学科

組織図・活動内容などについて

富山大学アドミッションセンターは、本学の入学者受入方針に合致した優秀な学生の確保や志願者の増加を図ること等を目的として、平成17年に設置された。各学部局への入試情報の提供、広報活動に関する企画・立案、入試方法の改善に関する調査・研究、入試データの蓄積及び分析・評価等を実施し、本学の円滑な入学者選抜に寄与している。センター長(兼任)、専任教員1名、各

学部から選出された教員及び入試グループにより業務を行っている。

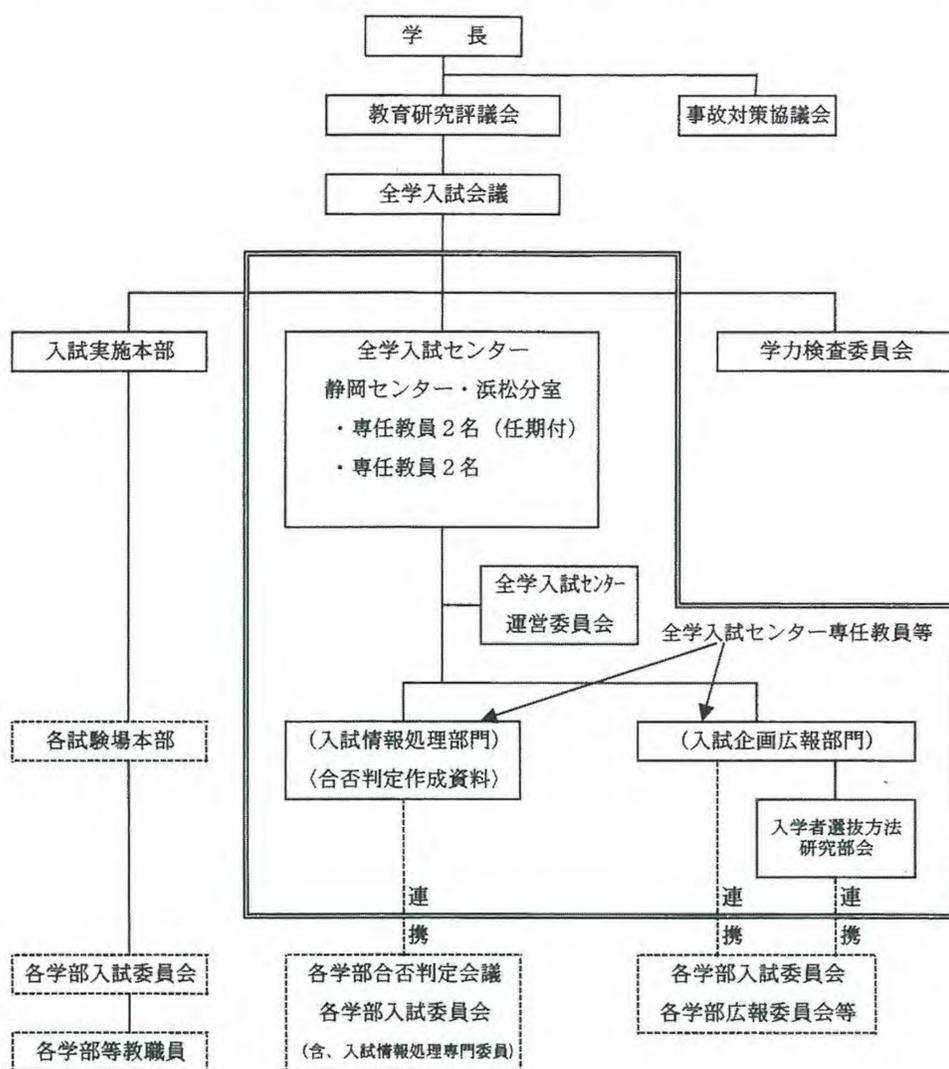
平成24年度は、業者主催の大学説明会(75回出席)及び高等学校での大学説明会・模擬授業等へ各学部教員の協力を得て参加(67回出席)し、高等学校生徒、PTAの富山大学キャンパスへの見学(30回)に対応するなど、活発に活動を行った。



AO入試の導入・実施状況

	経済学部	理学部
平成19年 2007年	○	
平成20年 2008年		○ 地球科学科
平成21年 2009年		
平成22年 2010年		
平成23年 2011年		
平成24年 2012年		

当センターは平成15年10月に設置され、本学の入学者選抜に関する企画、広報及びデータ分析等を専門的に調査・研究し、各部局で実施する入学試験を専門的立場から支援し、本学における円滑な入学者選抜の実施に寄与することを目的とする。入試企画広報部門（2名：静岡市）は、入試に係る調査・研究、入試方法の改善及び入学者の分析、入試に係る広報計画の企画・立案及び広報活動、入試に関連する高大連携、事故の未然防止対策の策定に関することなどを、入試情報処理部門（1名：浜松市）は大学入試センターとのデータ交換処理に関すること、個別学力検査入試情報処理及び合否判定資料の作成、入学者選抜データ等の統計資料作成、入試情報の公開及び開示資料の作成に関することなどを主たる業務としている。



AO入試の導入・実施状況

入試年度	人文学部 経済学科	情報学部 全2学科	理学部	工学部
平成12年度				
平成13年度				
平成14年度		◎般・専	○般 生物地球環境	○般（機械） ◎般（物質）
平成15年度				
平成16年度				
平成17年度				
平成18年度	○専・般		○般 地学のみ実施	機械：○般から◎般に ◎般を電気電子でも実施
平成19年度	◎専 一般枠取り止め		○般 地学・生物で実施	4学科中3学科：般・専 4学科中1学科：専のみ
平成20年度				
平成21年度				
平成22年度			生物で取り止め 地学のみ実施	全4学科が「般・専」に (1学科で一般枠を追加)
平成23年度				
平成24年度				
平成25年度		1学科が専 門枠のみに		改組（4学科から5学科に） 4学科：般・専、1学科：専

* 本学では、教育学部と農学部ではAO入試を実施していない。
 * 理学部は平成18年に生物地球環境科学科を生物科学科と地球科学科に改組
 * 人文学部は24年4月から人文社会科学部に改称

京都工芸繊維大学

組織図・活動内容などについて

アドミッションセンターは、本学のAO入試を主体となって実施するとともに、入学試験に関する調査・研究、進学相談等の入試広報を行うことを目的として、平成13年4月に設置されました。

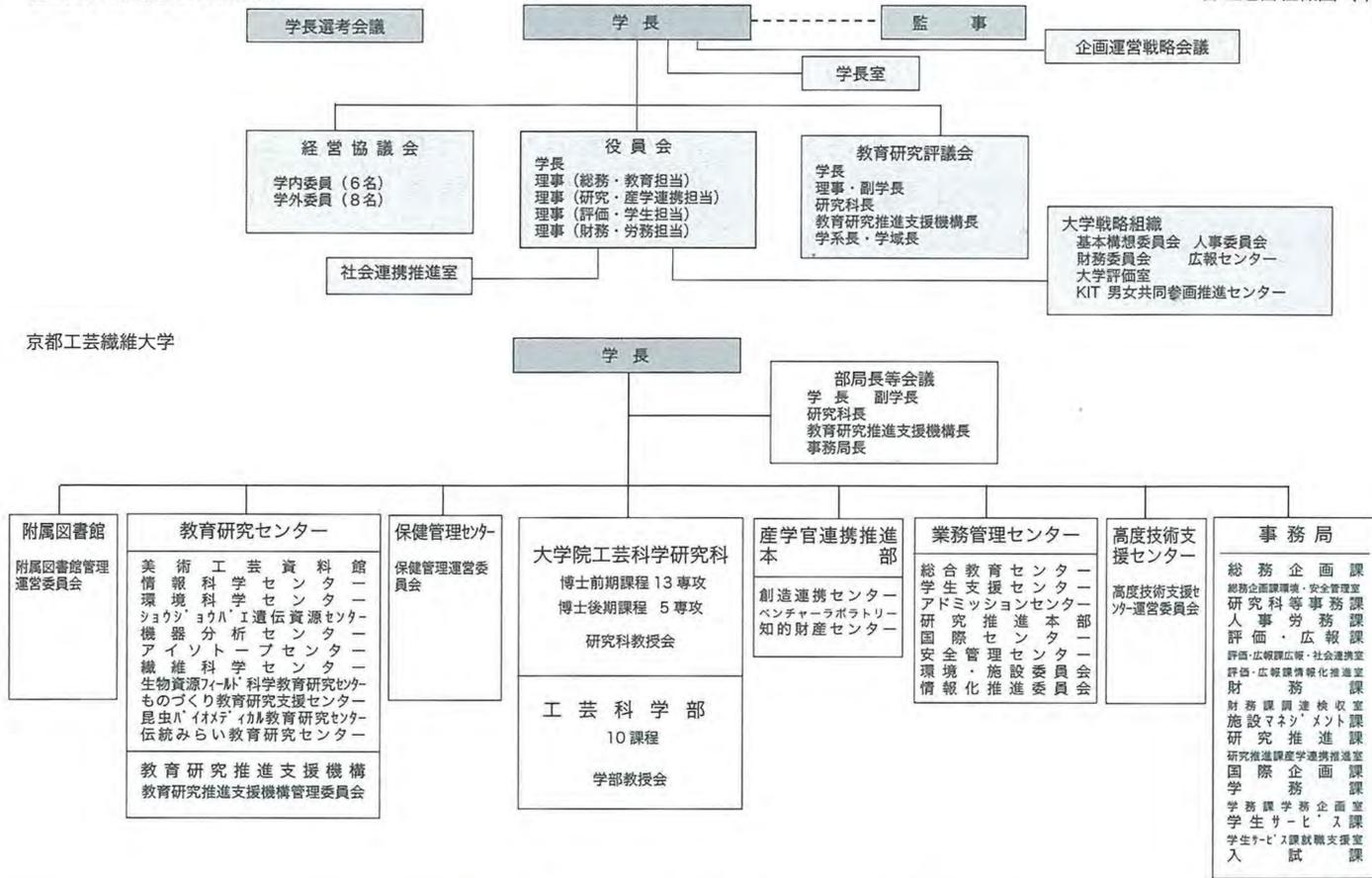
平成18年4月からは、これらの業務に加え、入学者選抜方法の調査・分析及びその結果に基づく入学試験の企画・立案並びに入試広報に関する企画・立案等を行っています。

■業務内容

- (1) 入学者選抜方法の調査・分析及び企画・立案
- (2) 入学試験の広報に関する企画・立案
- (3) 入学試験の企画及び調整
- (4) その他入学試験等に関する調査及び検討

国立大学法人京都工芸繊維大学

管理運営組織図 (平成25年4月)



京都工芸繊維大学

AO入試の導入・実施状況

入試年度	工芸学部	繊維学部	工芸科学部
平成14年度	◎般 全4学科 ◎社 全4学科(夜間主コースのみ) ◎帰 物質工学科・造形工学科 (昼間コースのみ)	◎般 全3学科 ◎社 全3学科 (夜間主コースのみ)	
平成15年度			
平成16年度			
平成17年度			
平成18年度			◎般 全課程、系 ◎社 先端科学技術課程 ◎帰 造形工学課程
平成19年度			◎帰 デザイン経営工学課程 ●社
平成20年度			
平成21年度			
平成22年度			
平成23年度			
平成24年度			
平成25年度			●帰

[特記事項]

- ・平成18年度に工芸学部と繊維学部の2学部を工芸科学部の1学部に改組再編
- ・表中、「般」は一般枠、「帰」は帰国生徒枠、「社」は社会人枠を示す

組織図・活動内容などについて

[沿革]

平成15年4月に鳥取大学アドミッションセンターとして設置。

平成19年6月に鳥取大学入学センターに改称。

平成22年4月に鳥取大学大学教育支援機構入学センターに組織換。

[目的]

当センターは、大学教育支援機構の教育研究施設として、全学的な立場による、入学者選抜制度の改善及び、入学者選抜の円滑な実施を図るとともに、本学への入学希望者に対する総合的な広報活動等及びアドミッションポリシーに対応した学生募集を行うことを目的とする。

[業務]

- ・学生募集の企画・立案及び実施に関すること
- ・入試の実施に関すること
- ・入試情報の提供、広報に関すること
- ・入学者選抜方法等の調査研究に関すること
- ・その他入学者選抜に関して必要な業務

[人員]

センター長兼副学長（入試担当）1名（兼任）
専任教員3名（任期付）
兼務教員3名（地域学部、工学部、農学部）
事務補佐員1名



AO入試の導入・実施状況

	地域学部	医学部	工学部	農学部
平成16年 2004年	◎ 3学科 ¹⁾		◎ 全8学科	◎ 全2学科
平成17年 2005年				
平成18年 2006年			● 物質工学科	
平成19年 2007年	◎ 地域環境学科			
平成20年 2008年			● 3学科 ²⁾	
平成21年 2009年				
平成22年 2010年				
平成23年 2011年			● 3学科 ³⁾	
平成24年 2012年				
平成25年 2013年				

[特記事項]

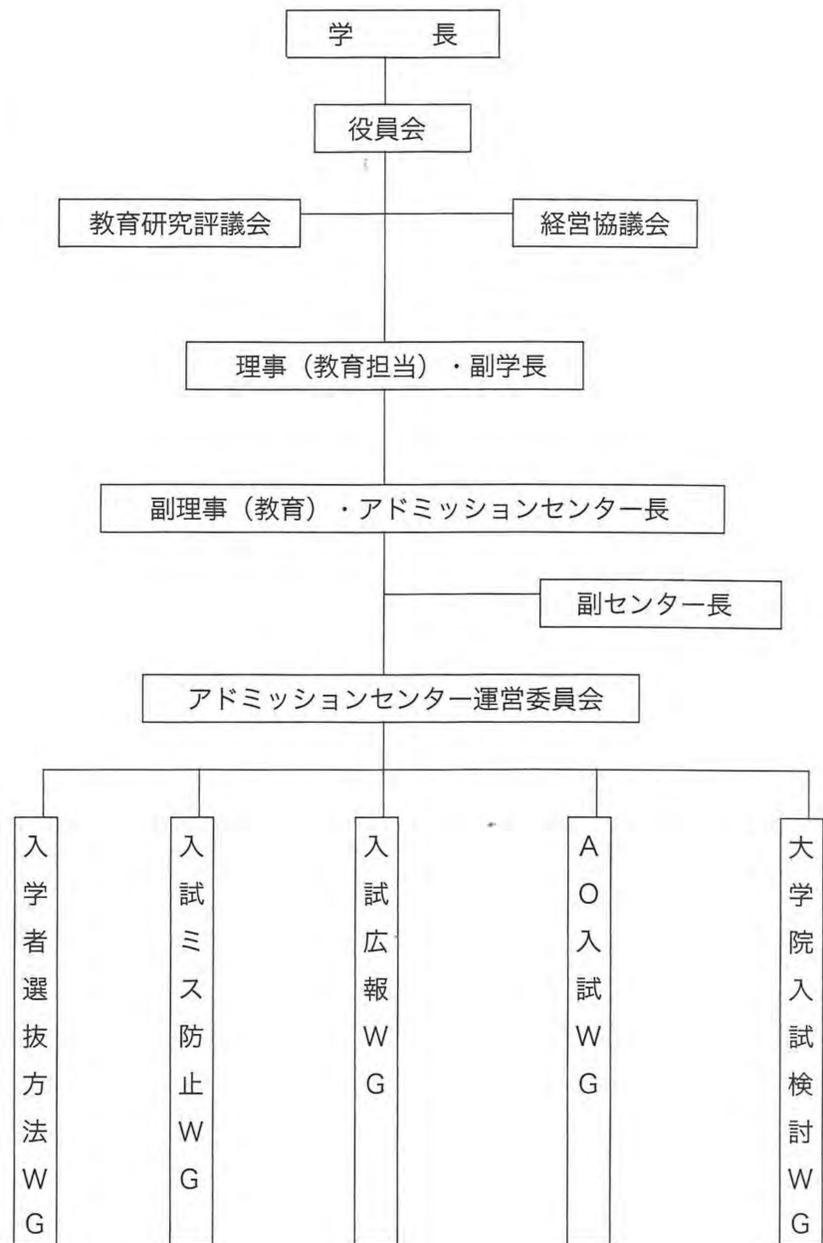
1) 実施学科は、地域政策学科、地域教育学科、地域文化学科

2) 取り止め学科は、機械工学科、知能情報工学科、電気電子工学科

3) 取り止め学科は、生物応用工学科、土木工学科、応用数理工学科

組織図・活動内容などについて

アドミッションセンターは、入学試験の実施と適切な入学者選抜方法の研究開発及び入学希望者に広報活動を行うセンターであり、平成16年4月に設置されました。平成24年度は、副理事兼センター長1人、専任教員3人、協力教員1人、事務補佐員1人の計6人体制です。アドミッションセンター運営委員会は、アドミッションセンター教員及び各学部入試委員から構成され、入学者選抜に係る企画及び実施、オープンキャンパス・各種入試説明会等の入試広報活動、大学入試センター試験の実施等について審議します。その下には5つのWGが置かれ、①入学者選抜方法WGは入学者選抜方法の在り方とその研究を行い、②入試ミス防止WGは入試の適正な実施方法の検討を行います。③入試広報WGは入試広報の検討を、④AO入試WGはアドミッション・オフィス入試の企画・検討を、⑤大学院入試検討WGは大学院入試の検討を、それぞれ専門的に行います。



AO入試の導入・実施状況

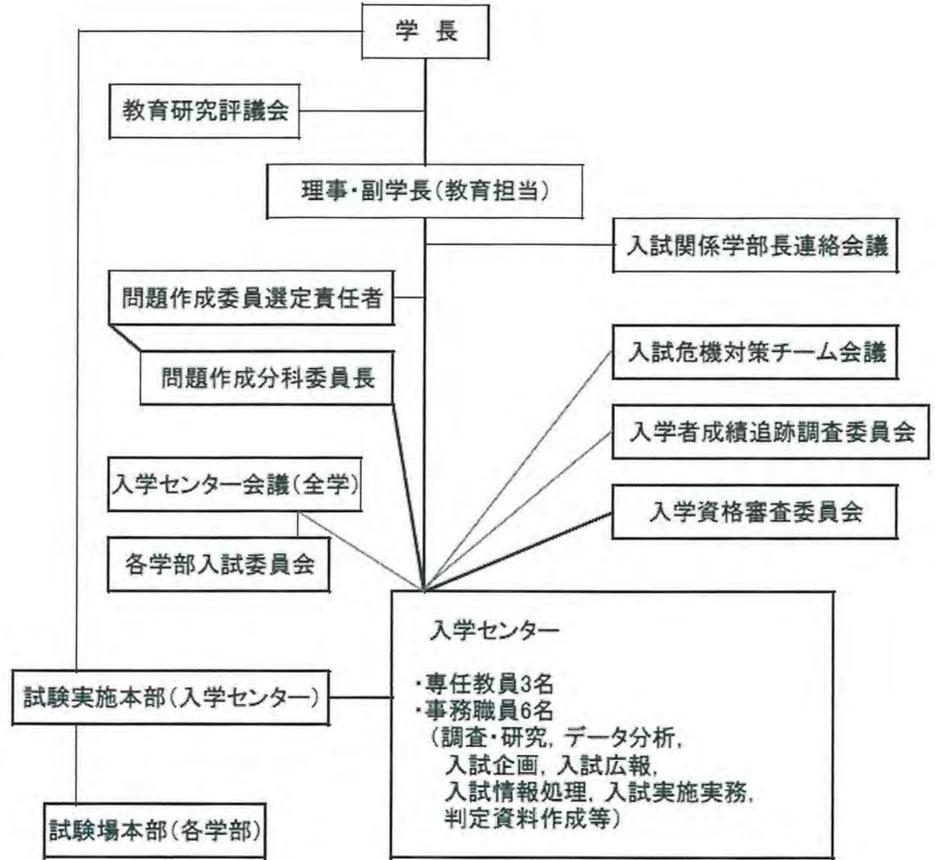
入試年度	文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	医学部 医学科	医学部 保健学科	歯学部	薬学部	工学部	環境理工学部	農学部	マッチングプログラムコース
平成18年度 (2006年度)		○ 全2課程	○ 昼間コース		○ 物理学科 化学科、 生物学科、 地球科学科				○ 全2学科		◎ 環境数理学科、 環境デザイン学科、 環境物質工学科		◎
平成19年度 (2007年度)					○→◎ 物理学科 ◎ 数学科								
平成20年度 (2008年度)					①物理チャレンジ 物理学科								
平成21年度 (2009年度)													
平成22年度 (2010年度)													
平成23年度 (2011年度)													
平成24年度 (2012年度)					②国際バカロレア 全5学科		②国際バカロレア 全3専攻			②国際バカロレア 全4学科		②国際バカロレア	②国際バカロレア
平成25年度 (2013年度)					● 全5学科						◎→○ 環境数理学科、 環境デザイン学科、 環境物質工学科		③国際バカロレア

そのほか、特色あるAO入試(センター試験を「課さない」として、①全国物理コンテスト「物理チャレンジ」に参加し第2チャレンジに出場した者を対象としたAO入試(物理チャレンジ)、②国際バカロレア資格取得者を対象とした4月入学国際バカロレア入試(AO入試)、③国際バカロレア資格取得者を対象とした10月入学国際バカロレア入試(AO入試)を実施している。

広島大学

組織図・活動内容などについて

AO入試の導入に合わせ、平成13年度に「アドミッションセンター」を立ち上げた。その後、入学希望者の進路意識や学力構造の多様化に伴う、新しい入学者選抜方法や入学制度を構築する必要から、平成16年度に既存の学生部入試課と統合し、本学の入学者選抜業務を一元的に取り扱う「入学センター」に改組した。



AO入試の導入・実施状況

学部・学科等		平成12年度 2000年度	平成13年度 2001年度	平成14年度 2002年度	平成15年度 2003年度	平成16年度 2004年度	平成17年度 2005年度
総合科学部	総合科学科			◎(帰国子女)			
文学部	人文学科			◎(40~60歳未満)			(ゼミナール方式・一般)
教育学部	第一類(学校教育系)			○(卒見)			
				○(卒見)			
	第二類(科学文化教育系)						
				◎(卒見)			
	第三類(言語文化教育系)						
教育学部	第四類(生涯活動教育系)						
	第五類(生涯活動教育系)			○(卒見・4.3以上)			
法学部	法学科昼間コース 法学科夜間主コース			○(22歳未満・有職者)			
経済学部	経済学科昼間コース 経済学部夜間主コース			◎(22歳以上)	◎(卒見)		
理学部	数学科			◎(卒見)			
	物理科学科			◎(既卒可)		(大検も可)	(1浪まで・大検不可)
	化学科			◎(既卒可)		(大検も可)	
	生物科学科						
医学部	地球惑星システム学科			◎(既卒可)		(大検も可)	
	医学科 総合薬学科			◎(1浪まで)			
歯学部	保健学科						
	歯学科			○(1浪まで・A段階)			
工学部	口腔保健学科						
	第一類(機械システム工学系)						
	第二類(電気・電子・システム・情報系)			◎(卒見)			
生物生産学部	第三類(化学・バイオ・プロセス系)						
	第四類(建設・環境系)						
生物生産学部	生物生産学科			○(既卒可・関連課程履修者)			

AO入試(高齢者対象フェニックス入学制度)

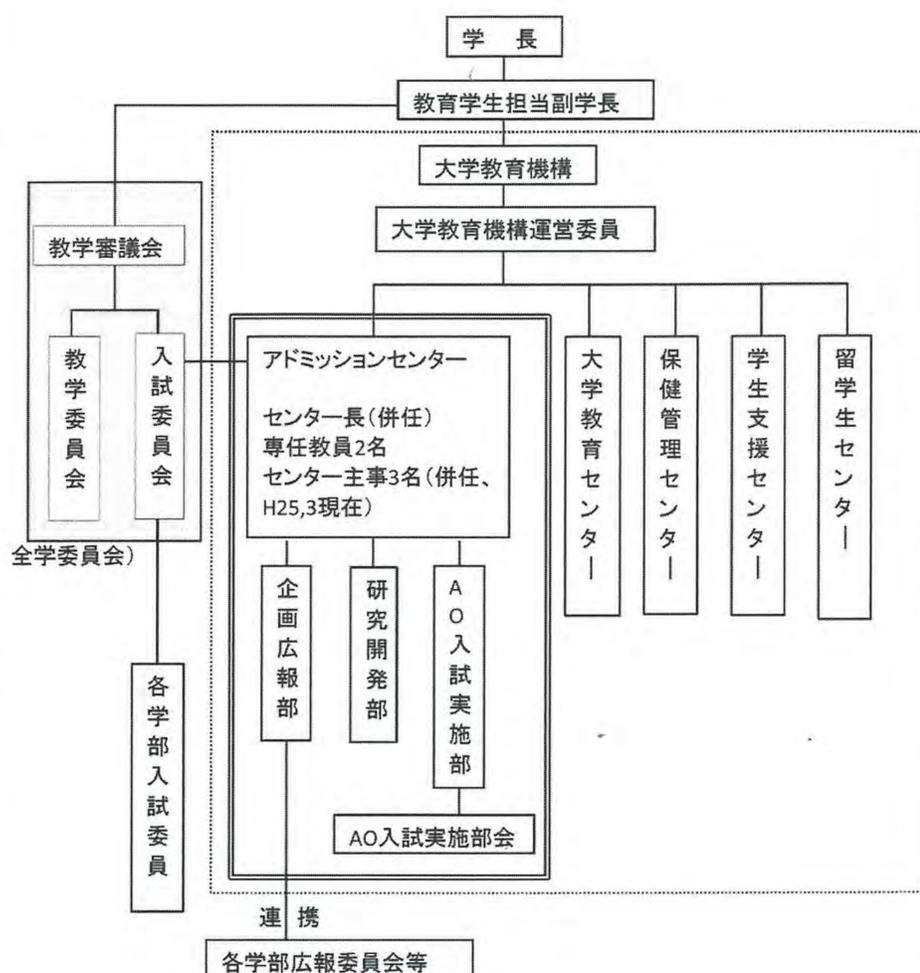
学部・学科等		平成12年度 2000年度	平成13年度 2001年度	平成14年度 2002年度	平成15年度 2003年度	平成16年度 2004年度	平成17年度 2005年度
総合科学部	総合科学科			◎(50歳以上)			
文学部	人文学科			◎(60歳以上)			(50歳以上)
教育学部	第二類(科学文化教育系)			◎(60歳以上)			
				◎(60歳以上)			
				◎(60歳以上)			
	第三類(言語文化教育系)			◎(60歳以上)			
				◎(60歳以上)			
教育学部	第四類(生涯活動教育系)			◎(60歳以上)			
				◎(60歳以上)			
	第五類(生涯活動教育系)			◎(60歳以上)			
法学部	夜間主コース			◎(60歳以上)			
経済学部	夜間主コース			◎(60歳以上)			
工学部	第一類(機械システム工学系)			◎(60歳以上)			
	第二類(電気・電子・システム・情報系)			◎(60歳以上)			
	第三類(化学・バイオ・プロセス系)			◎(60歳以上)			
	第四類(建設・環境系)			◎(60歳以上)			
生物生産学部	生物生産学科			◎(55歳以上)			

(平成18年度以降は、紙数の関係で割愛させていただきました。)

組織図・活動内容などについて

山口大学アドミッションセンターは、入学者選抜方法の改善等についての調査研究、入学者選抜業務に係る企画・広報・業務及び AO 入試の実施等の業務を行うことにより、山口大学の教育研究の充実発展に寄与することを目的として、平成 13 年 4 月に山口市の吉田キャンパスに設置された。

アドミッションセンターの研究開発部は、入学者選抜方法の改善に関する調査研究に関することや、学生募集に係る広報の調査研究に関することや、その他入学者選抜に係る調査研究に関することを主たる業務とし、企画広報部は、入学者選抜業務に係る企画に関することや学生募集に係る広報に関することや、その他入学者選抜に係る企画・広報に関することを主たる業務とし、AO 入試実施部は、AO 入試の企画・立案・実施に関することや AO 入試の合否判定資料の作成に関することや、その他 AO 入試に関することを主たる業務としている。



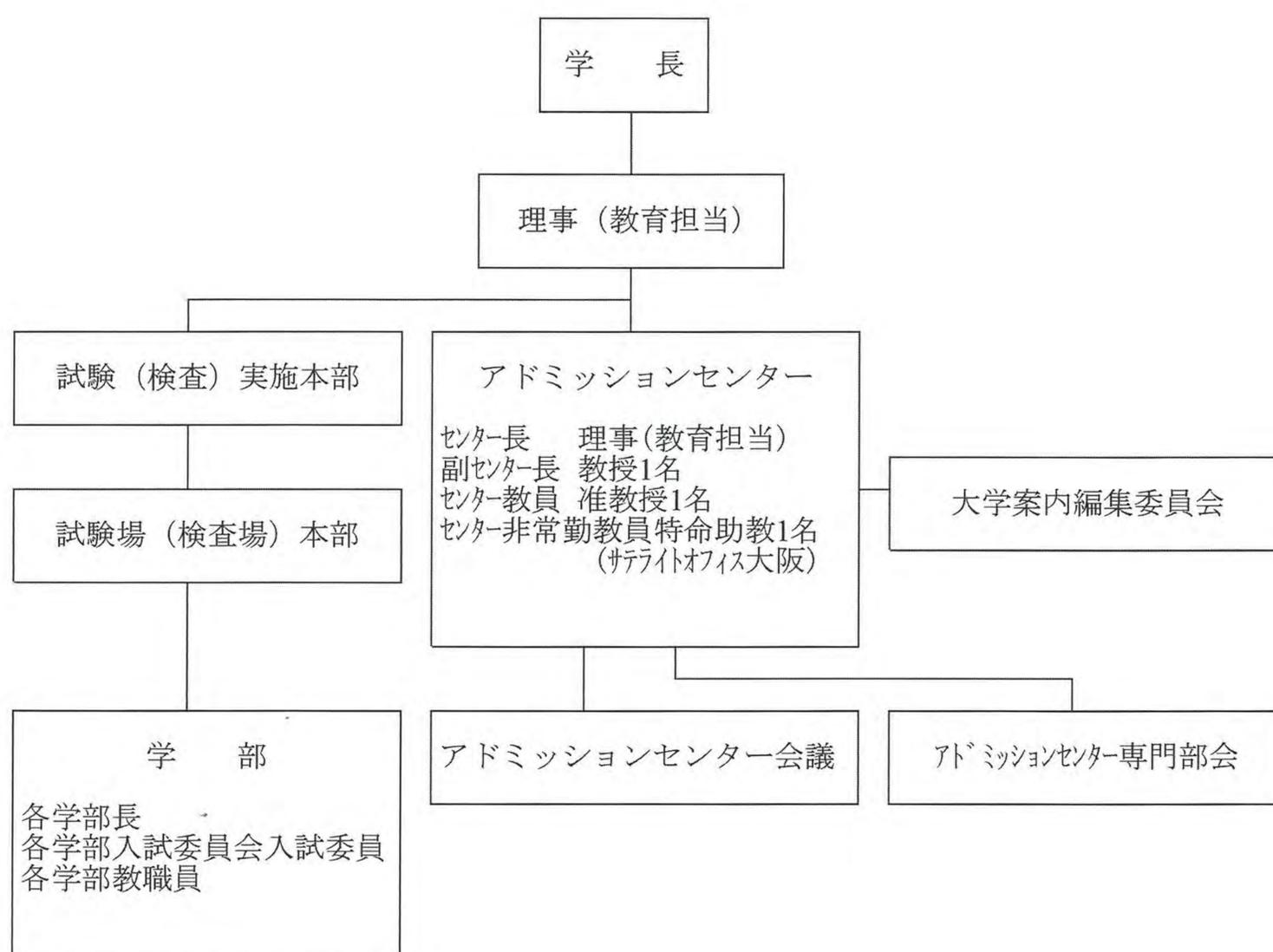
AO入試の導入・実施状況

	人文学部	教育学部	経済学部	理学部	工学部
平成 12 年度 2000 年度					
平成 13 年度 2001 年度					
平成 14 年度 2002 年度			◎ 全 4 学科 1 課程	◎ 2 学科	◎ 全 7 学科
平成 15 年度 2003 年度	◎ 全 2 学科	◎1 課程 (1 コース)			
平成 16 年度 2004 年度					
平成 17 年度 2005 年度					
平成 18 年度 2006 年度		◎1 コース追加 1 課程(2 コース)	改組・全 5 学科 1 課程	改組・3 学科 (1 コース)	
平成 19 年度 2007 年度					改組・全 7 学科
平成 20 年度 2008 年度					
平成 21 年度 2009 年度		◎1 課程 1 コース 追加 2 課程 (3 コース)			
平成 22 年度 2010 年度					
平成 23 年度 2011 年度					
平成 24 年度 2012 年度					
平成 25 年度 2013 年度					

組織図・活動内容などについて

香川大学アドミッションセンターは、更なる少子化を迎えるに当たり、地域ニーズにも配慮した多様な判定基準に基づく入試方法の開発を目指すとともに、効率的な入試体制を構築するための調査研究を行うため、平成17年4月に設置された。

当センターでは、新たな入学者選抜方法の開発に向けての調査研究と、新たな受験生発掘のための積極的な入試広報活動を展開しており、活動範囲拡充のため、平成21年4月から非常勤教員（特命助教）1名をサテライトオフィス大阪（大阪府）に常駐させている。



組織図・活動内容などについて

【沿革】

平成16年4月 大学教育総合センターに専任教員1名を配置。

平成16年12月 大学教育総合センターを廃し、教育・学生支援機構を設置、教育・学生支援機構に学生支援センターを設置。同センターの一部門としてアドミッションオフィスが発足。

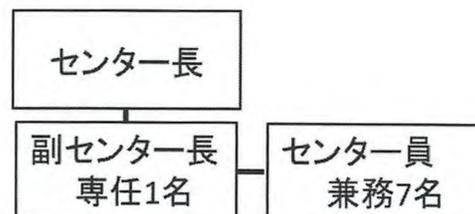
平成19年4月 教育・学生支援機構にアドミッションセンターを設置。

【業務】

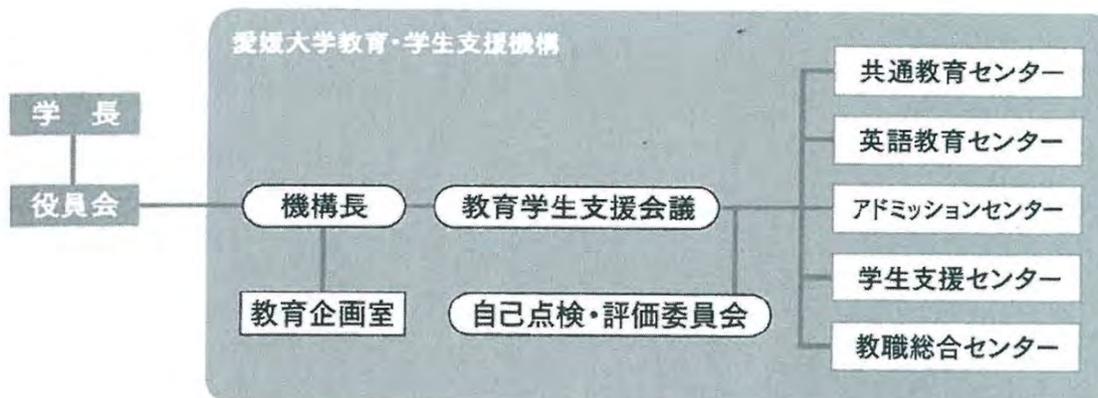
1. 入学者選抜方法に係る調査及び検討に関すること
2. 入試情報の提供及び広報に関すること
3. アドミッション・オフィス入試
(AO入試)に係る学 生募集の企画・立案に関すること

4. 大学説明会、進学指導ガイダンス等の企画・立案及び実施に関すること
5. 高大連携に関すること
6. その他教育・学生支援機構長の指示する業務

【構成】



法文学部2名(総合政策学科1名, 人文学科1名), 教育学部1名, 理学部1名, 医学部1名, 工学部1名, 農学部1名



AO入試の導入・実施状況

	スーパーサイエンス特別コース	法文学部総合政策	法文学部人文	教育学部	理学部	農学部
平成17年度(2005)	◎15					
平成18年度(2006)						
平成19年度(2007)		◎地域7		◎造形芸術4		
平成20年度(2008)	11	◎6		◎情報教育5		◎農山漁村地域マネジメント10
平成21年度(2009)		◎観光まちづくり5	◎観光まちづくり5			◎海洋生産科学5
平成22年度(2010)				◎特別支援8		
平成23年度(2011)			◎昼20夜10 ◎昼10夜5 ◎社会人5	5	◎学校教育A4 ◎学校教育B6 ◎数8物8 ◎化生地6	◎8
平成24年度(2012)						
平成25年度(2013)					6	

数字は募集人員

組織図・活動内容などについて

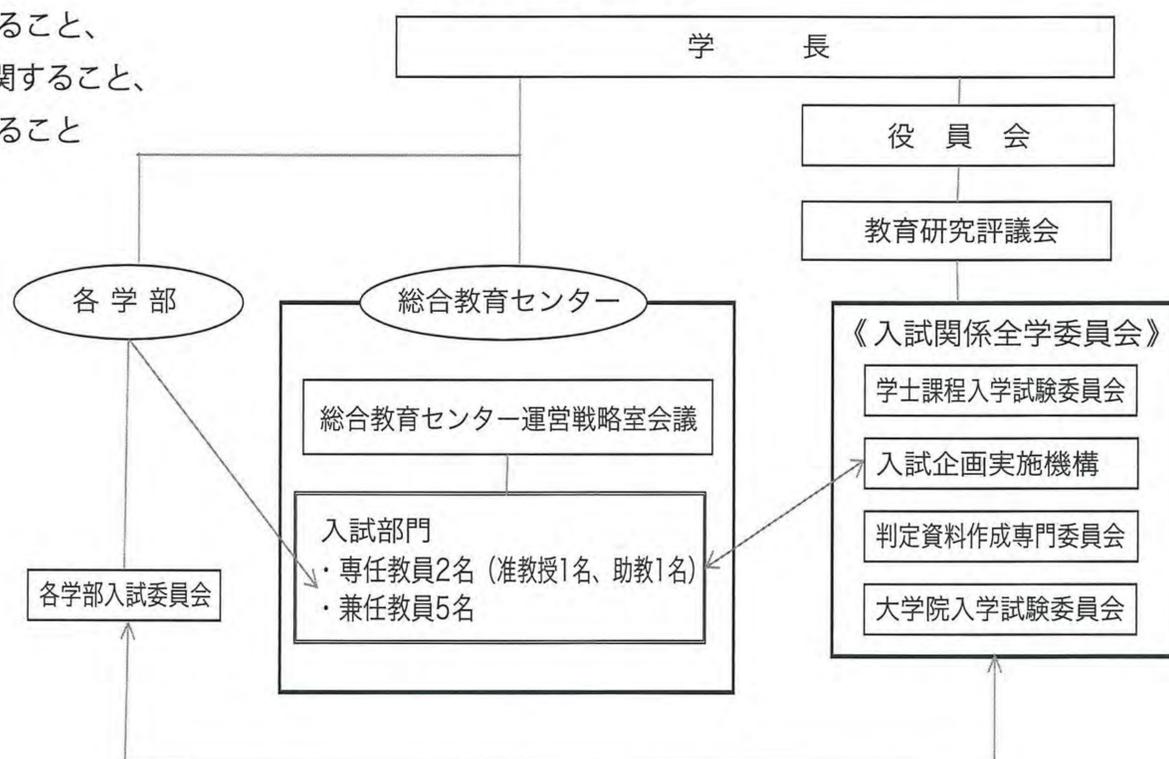
現在の総合教育センター入試部門は、平成18年4月に設置され、入学者の入学後における動向を長期間にわたって追跡的に調査・解析し、アドミッションポリシーにもとづく入学者選抜方法の妥当性について検証するとともに、それをふまえた広報活動の方策に関する検討を推進すること、及び研究の成果を社会に公表し、入学者選抜方法に関する社会的説明責任を果たすことを目的とする。主な業務としては、

- ア) 入学者選抜の実施支援に関すること、
- イ) 入学者選抜のあり方の研究に関すること、
- ウ) 入学後の成績追跡調査に関すること

を行っており、「より多くの志願者、アドミッションポリシーに叶う入学者の確保」を目指している。

当部門は専任教員2名と各学部から選出された兼任教員5名で構成され、事務的業務は入試課入試広報室が行っている。

また入試の実施組織である入試企画実施機構には専任教員1名が委員となっており、実施にあたっては連携を取り、支援している。



AO入試の導入・実施状況

	人文学部	医学部	土佐さきがけプログラム
平成15年度 2003年度		◎ 医学科	
平成16年度 2004年度			
平成17年度 2005年度			
平成18年度 2006年度			
平成19年度 2007年度			
平成20年度 2008年度	◎ 社会経済学科		
平成21年度 2009年度			
平成22年度 2010年度			
平成23年度 2011年度			
平成24年度 2012年度			◎ 国際人材育成コース
平成25年度 2013年度			○ 生命・環境人材育成コース
平成26年度 2014年度			○ グリーンサイエンス人材育成コース

組織図・活動内容などについて

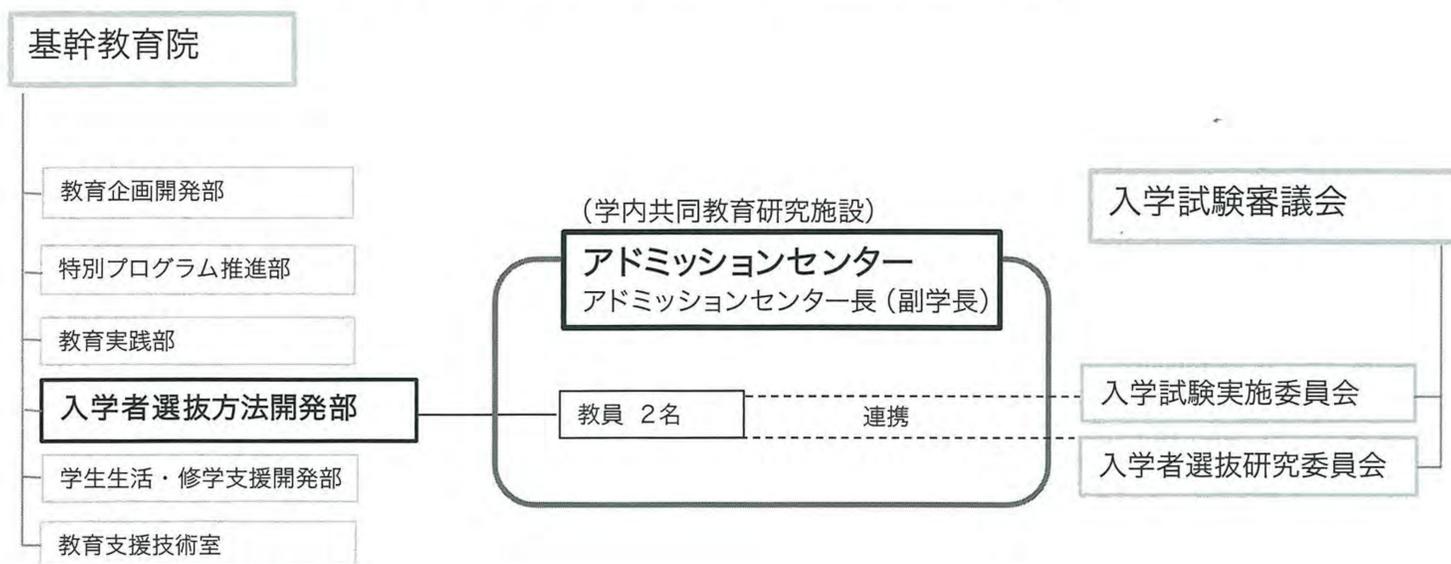
21世紀に世界で活躍する人材を育成するため、総合評価方式によるアドミッション・オフィス入試（AO入試）の実施を行うこと及びAO入試による入学者選抜の企画・立案・実施に関する業務を行うことを目的として1999年4月に設置された。

その後、2003年4月には、全学教育研究を担当する大学教育センターと、新設の21世紀プログラム教育研究の専任部門を加えて統合改組され、新しく高等教育総合開発研究センター（※）となった。しかし、実績のあるアドミッションセンターは学内措置で存続することとし、

現在は基幹教育院の入学者選抜方法開発部の教員（2名）と学務部入試課の職員が引き続き担当している。（アドミッションセンターの所在地は福岡市）

AO入試の実施母体となるだけでなく、多面的な選抜方法の調査・研究、そしてその成果を更に実際の入学者選抜にフィードバックするほか、進路相談や、体験入学などの入学情報の提供も行っている。

（※）高等教育総合開発研究センターは、その後、2006年6月に高等教育開発推進センターへ、さらに2011年10月には基幹教育院へ改組された。



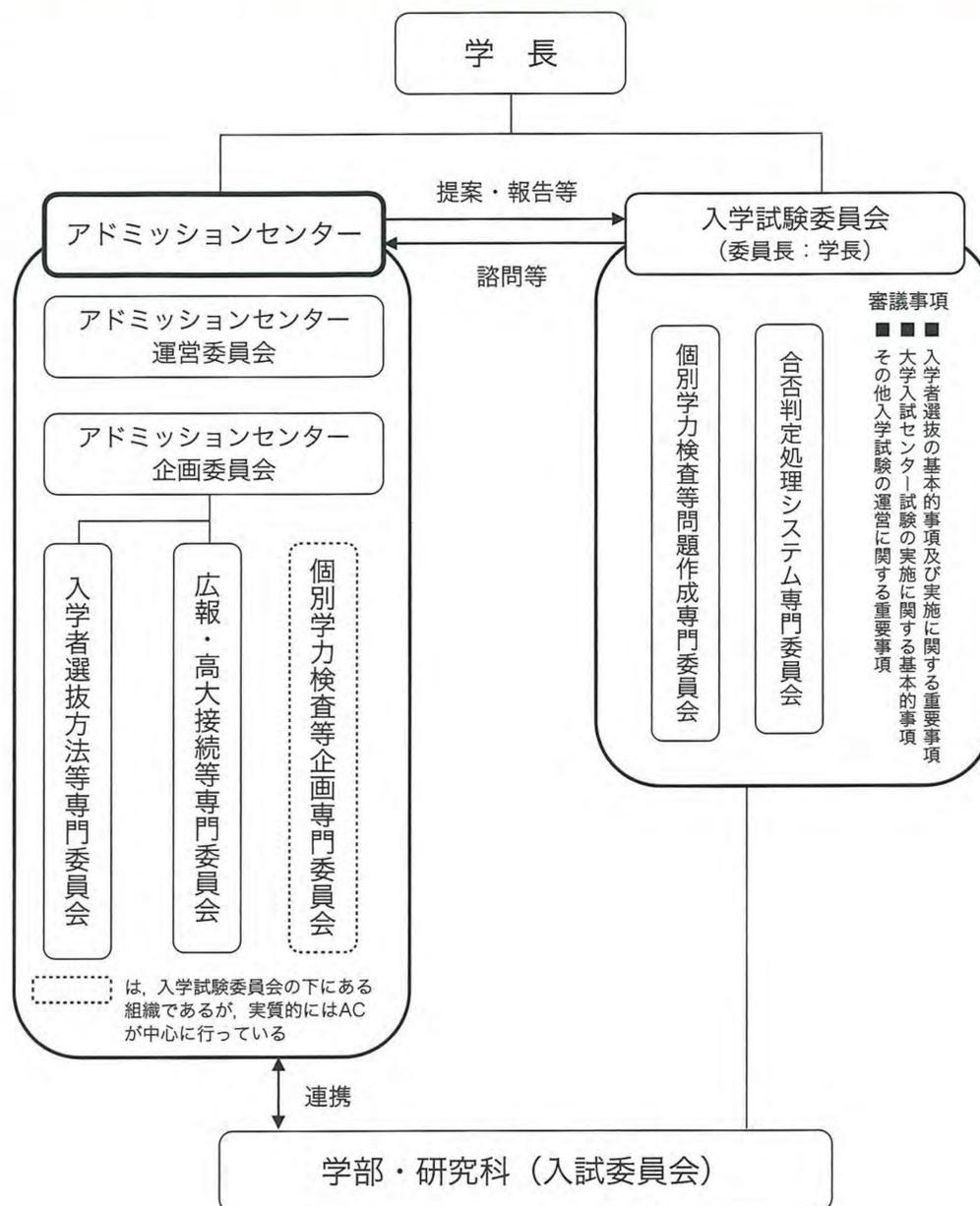
AO入試の導入・実施状況

	教育学部	法学部	理学部	医学部	歯学部	薬学部	芸術工学部	農学部	21世紀プログラム
平成12年 2000年		◎				◎ 総合薬学科		○	
平成13年 2001年					○				◎
平成14年 2002年			○ 数学科						
平成15年 2003年			○ 2学科 (化学、生物)	○ 保健学科 (全専攻)					
平成16年 2004年			○ 2学科(物理、 地球惑星)						
平成17年 2005年									
平成18年 2006年						◎ 全学科(※)	○ 2学科 (工業設 画像設計)		
平成19年 2007年									
平成20年 2008年							○ 3学科 (環境設計、 音響設計、 芸術情報設計)		
平成21年 2009年	◎								
平成22年 2010年		●							
平成23年 2011年									
平成24年 2012年									
平成25年 2013年						● 全学科			

（※）総合薬学科は平成17年度まで。平成18年度から創薬科学科、臨床薬学科の2学科。

組織図・活動内容などについて

佐賀大学アドミッションセンターは、平成19年10月に設置され、入学者選抜、入試広報、高大接続等に関する企画、立案等の業務を行うとともに、学部及び研究科で実施する入学者選抜を専門的立場から支援し、佐賀大学の教育研究の充実発展に寄与することを目的としている。センターは、センター長、副センター長、専任教員（1名）、部局からの選出教員によって構成される。主な業務は、①入学者選抜の制度、方法等の設計に関すること。②入試広報の企画、立案等に関すること。③高大接続、高大連携活動等の企画、立案等に関すること。④その他入学者選抜に関することである。センターで実施した分析・調査・活動等は、『アドミッションセンター報告書』にまとめ、学内に配布している。



AO入試の導入・実施状況

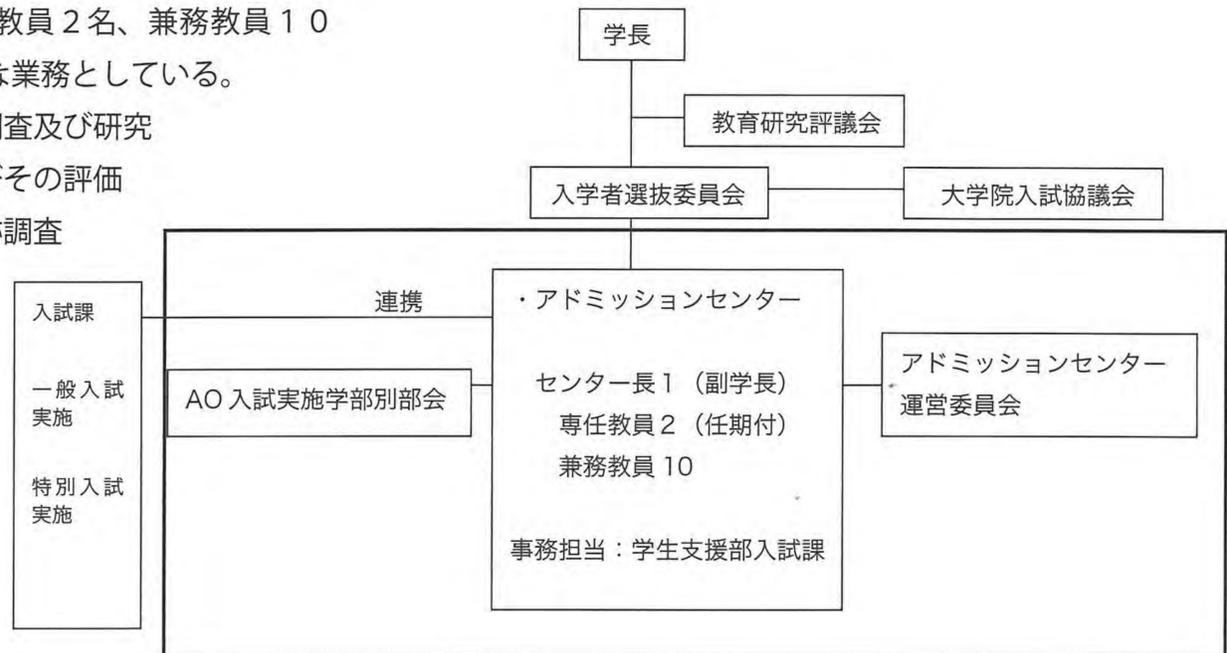
	文化教育学部
平成20年 2008年	◎ 学校教育課程（音楽選修：2名） 人間環境課程（健康スポーツ選修：3名）
平成21年 2009年	
平成22年 2010年	
平成23年 2011年	
平成24年 2012年	

組織図・活動内容などについて

当センターは平成14年4月に設置され、本学においてアドミッションポリシーに沿った入学者選抜を行うための調査及び研究を行うとともに、本学入学者選抜に関する諸課題に対応し、各部局における入学者選抜への助言及び支援を行うことを目的とする。センター長（1名：兼務）以下、専任教員2名、兼務教員10名の構成で、以下のことを主な業務としている。

- ・ 入学者選抜方法等に係る調査及び研究
- ・ 入学者選抜結果の分析及びその評価
- ・ 入学者の学業成績等の追跡調査
- ・ AO入試の実施

- ・ 入学者選抜全般の方法に関する情報提供、助言及び支援
- ・ 入学前教育の支援
- ・ 入学希望者及びその関係者を対象とした大学の広報
- ・ その他入学者選抜に関すること



AO入試の導入・実施状況

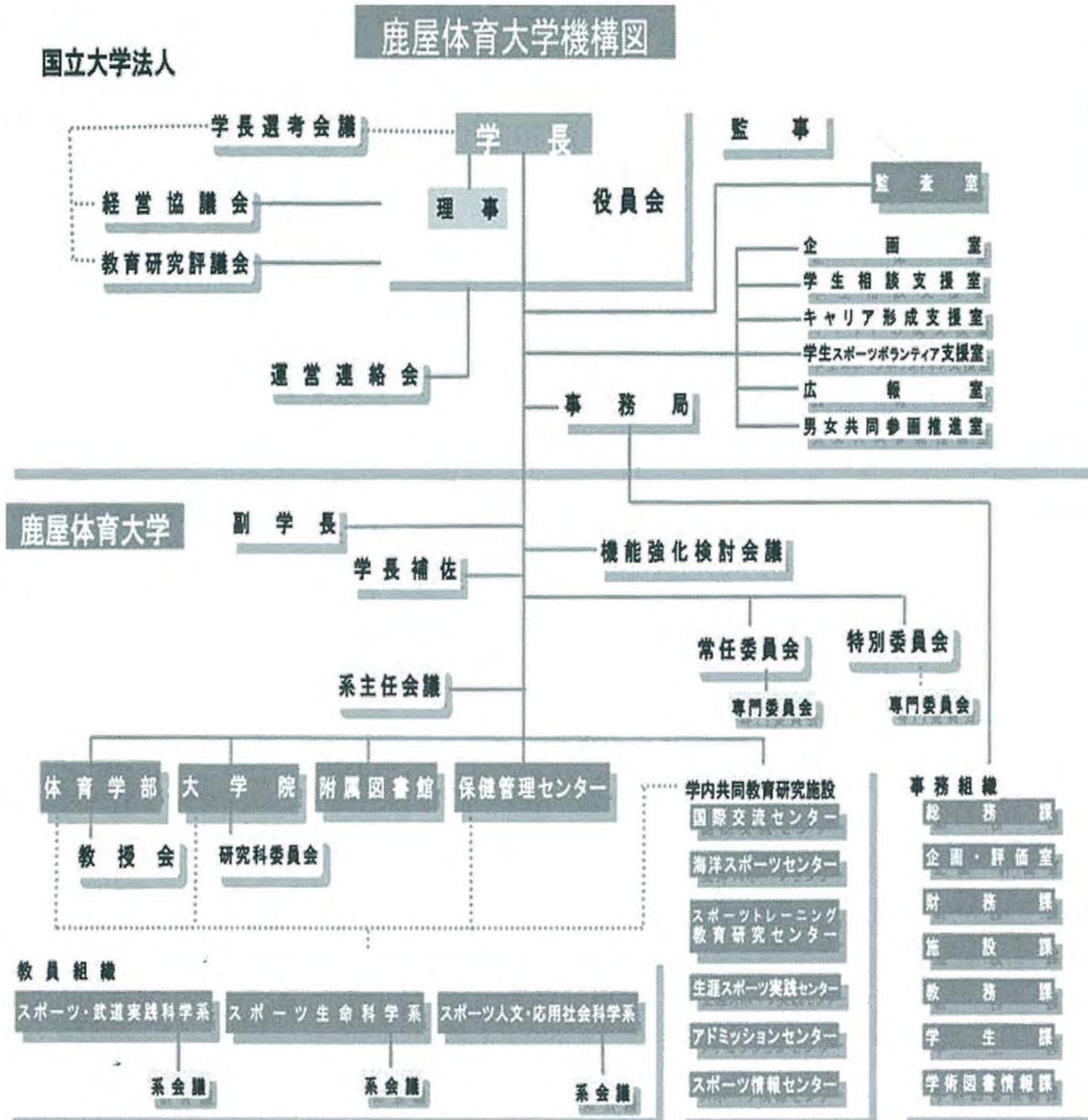
種別 学部	AO入試	
	AO入試 I	AO入試 II
教育学部	平成14年度～般	
経済学部	平成15年度～般	
医学部		平成15年度～19年度 般 平成20年度～21年度 3区分で実施。ともに般 (地域医療) (研究者) (国際医療) 平成22年度 2区分で実施。ともに般 (研究者) (国際医療) 平成23年度～区分変更。ともに般 (国際保健医療) (熱帯医学研究医)
歯学部	平成14年度～17年度 般	平成18年度～般
薬学部 薬科学科	平成15年度～16年度 般	平成17年度～般
工学部	平成15年度～16年度 2学科で実施。専・般 平成17年度～22年度 7学科で実施。 専2学科。般7学科 平成23年度～24年度 6コースで実施。 専2コース。般6コース 平成25年度～専・般ともに6コース	平成23年度～6コースで実施。ともに般
環境科学部	平成17年度～1区分で実施 般	平成15年度～16年度 2区分で実施。ともに般 (文系受験) (理系受験)
水産学部	平成14年度～21年度 般 平成22年度～ 専	

【特記事項】
専：専門枠
般：一般枠を示す

注) AO入試 I はセンター試験を課さない、AO入試 II はセンター試験を課す。

組織図・活動内容などについて

当センターは、平成15年4月1日に、入学者選抜制度全般について研究を行うとともに、アドミッションオフィス入学試験(AO入試)の企画・広報・実施に関する業務を行うことを目的として設置されました。主な事業として、受験生及び入学者の追跡調査、入試広報、入学前教育、入学後教育等を行っています。



AO入試の導入・実施状況

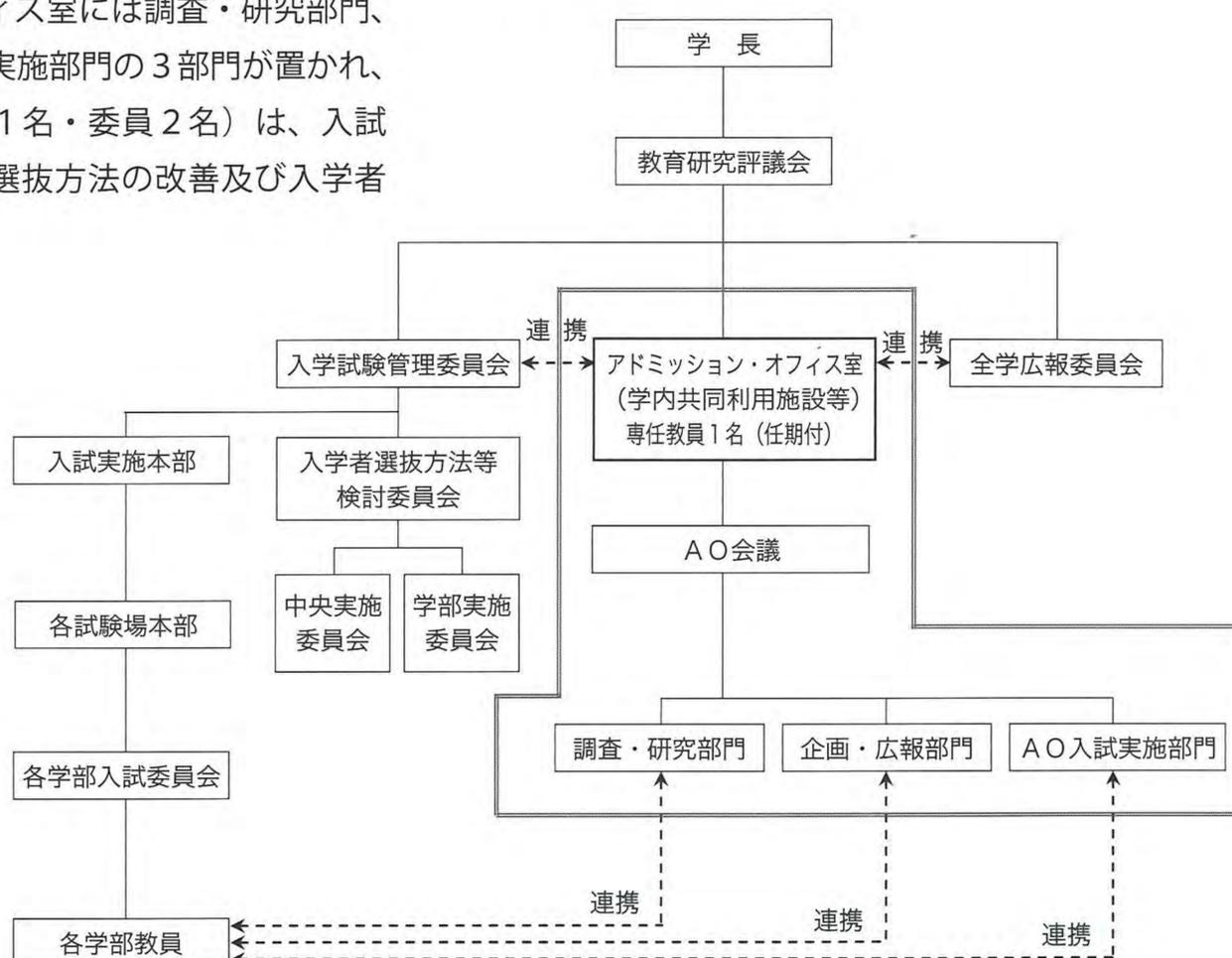
○平成16年年度入学者選抜からAO入試を導入
センター試験を課さず、本学のアドミッションポリシーに
基づき、競技力の高い学生を募集している。

組織図・活動内容などについて

本学のアドミッション・オフィス室は平成18年5月に設置され、専任教員は平成20年4月に配置された。AO入試は平成20年度から実施され、アドミッション・オフィス室の業務として本学の学部・学科等と連携してAO入試実施及びその他入試に係る調査・研究、企画・広報並びに入試の改善を図ることを目的としている。

アドミッション・オフィス室には調査・研究部門、企画・広報部門、AO入試実施部門の3部門が置かれ、調査・研究部門（部門長1名・委員2名）は、入試に係る調査・研究、入試選抜方法の改善及び入学者

の入学前・入学後の成績との分析等を担当し、企画・広報部門（部門長1名・委員2名）は、入試に係る広報計画の企画・立案や高等学校等へのリクルート活動等を担当する。また、AO入試実施部門（部門長1名・委員2名）は、AO入試募集要項の作成やオープンキャンパスの実施（企画・立案含む）等を担当している。



AO入試の導入・実施状況

年	法文学学部	工学部
平成20年 2008年	○ 人間科学科	◎ 情報工学科
平成21年 2009年		◎ 電気電子工学科
平成22年 2010年		
平成23年 2011年		
平成24年 2012年	● 人間科学科	
平成25年 2013年		

国立大学アドミッションセンター連絡会議会則

平成15年6月4日制定 最終改正 平成23年5月24日

(名称)

第1条 本会は国立大学アドミッションセンター連絡会議と称する。

(目的)

第2条 本会は、高等学校・大学間の接続関係の改善及び加盟機関における入学者選抜等の業務改善に関する研究協議を行い、あわせて加盟機関相互の交流促進を図ることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は、前条の目的を達成するため、必要な事業を行う。

(構成員)

第4条 本会は、国立大学のアドミッションセンター、及び国立大学において高等学校・大学間の接続関係の改善に関する研究及び実践に携わる機関によって構成する。

2 本会の加盟機関は、別表に掲げる機関とする。

3 新たに入会しようとする国立大学の機関は、総会の承認を得るものとする。

(役員)

第5条 本会に以下の役員を置く。

- 一 会長 1名
- 二 事務局長 1名
- 三 運営委員 各加盟機関からの代表1名
- 四 幹事 運営委員の中から会長の委嘱
6名

2 会長及び事務局長は総会において選出する。
任期は2年とし、再選を妨げない。

3 役員は加盟機関の代表をもって、これにあてる。

(役員職務)

第6条 会長は、総会を招集し、その議長となる。

- 2 事務局長は、本会の運営に必要な事務全般を行う。
- 3 運営委員は、本会の運営に携わる。

(事務局)

第7条 本会に、本会の事務を処理するための事務局を置く。

2 事務局は、事務局長の所属する機関に置く。

(雑則)

第8条 この会則に定めるもののほか、事業の実施に関し必要な事項は本会が別に定める。

附則

この会則は、平成15年6月4日から施行する。

附則

この会則は、平成17年6月1日から施行する。

附則

この会則は、平成18年5月31日から施行する。

附則

この会則は、平成19年5月29日から施行する。

附則

この会則は、平成20年5月25日から施行する。

附則

この会則は、平成21年5月19日から施行する。

附則

この会則は、平成22年6月7日から施行する。

附則

この会則は、平成23年5月24日から施行する。

別表(第4条第2項関係)

北海道大学アドミッションセンター
旭川医科大学入学センター
岩手大学大学教育総合センター
東北大学入試センター
山形大学エンロールメント・マネジメント部
茨城大学入学センター
筑波大学アドミッションセンター
横浜国立大学大学教育総合センター
福井大学アドミッションセンター
富山大学アドミッションセンター
静岡大学全学入試センター
京都工芸繊維大学アドミッションセンター
鳥取大学入学センター
岡山大学アドミッションセンター
広島大学入学センター
山口大学アドミッションセンター
香川大学アドミッションセンター
愛媛大学アドミッションセンター
高知大学総合教育センター
九州大学アドミッションセンター
佐賀大学アドミッションセンター
長崎大学アドミッションセンター
鹿屋体育大学アドミッションセンター
琉球大学アドミッション・オフィス

編集後記

十年一昔

『広辞苑』によると「十年一昔」とは「10年たてば、もう昔である。10年を一区切りと見て、その間には大きな変化のあるものだということ。」とあります。当初3大学で始まった国立大学のAO入試も10年経つと半数以上の大学で導入されるに至っています。先駆的な役割をされた東北大、筑波大、九大に、あらためて敬意を表す次第です。

本連絡会議でも、3大学には会長校や事務局を何度も担当していただいております。とくに柴田先生には、九大副学長時代に何度か会長をお願いし、24年5月30日の第10回総会では「国立大学AO入試の歩みと今後の課題」という演題で記念講演をお願いしました。貴重な資料とともに、講演録にまとめましたのでご一読ください。

24時間に例えたら

人生を24時間の時計に換算して考えると、今は何時にあたるのか？「人生時計」という言葉が、ものの例えとして使われているようです。一般的には「現在の年齢 ÷ 3」で計算をするようですが、これでは72歳で一生が終わってしまいます。人生を80年とすると10年で3時間の計算になりますので、こちらのほうが実感に近いかもしれません。

いずれにしても（どちらの方法で計算しても）、成人式を迎えた20歳であれば、早朝6時から7時前の時間帯、40歳で正午から午後1時くらいのお昼時、60歳になると18時～20時のアフターファイブ・夕食の時間帯ということでしょうか。

今回、AO入試で入学し、入学後に活躍している学生・卒業生の方を各大学からご紹介いただき「キラリと光る

学生達」として体験記風にまとめました。AO入試1期生でもまだ20代ですし、登場する多くの学生たちは20歳前後です。人生時計に例えるなら、世の中が動き始める前の6時台の時間帯にあたります。彼らが、この先どのようなランチタイムを迎えるのか、午後3時のティータイムにどのような評価を受けているのか、大いに興味のあるところですよ。

十年一日・十年一区切り

『広辞苑』によると「十年一日」とは「長い年月の間少しも変わらず同じ状態であること。」の意で、あまり良い意味で使われることはないようです。加盟大学の各センターが、学内でどのような位置づけになっているのか、機構・組織図などを大学別にまとめました。大学によっては時代の変化とともに、センターの役割が当初とは変わってきているところも少なくないようです。十年一区切りではありませんが、AO入試が始まってまだ10年です。次の10年でどれだけ社会的に評価の高い入試が実現できているのか、加盟機関相互で交流促進を図りながら、さらに進化していく必要があるでしょう。

御礼

最後になりましたが、記念誌の作成に際しましては、加盟大学各センターの皆さまはもちろんのこと、入試ご担当の職員の皆さまに大変お世話になりました。年度末に加え、入試業務等でご多用のところ、各種資料を作成していただき感謝しております。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

2013年6月

事務局 寺下 榮（静岡大学）

国立大学アドミッションセンター連絡会議

10周年記念事業実行委員会委員

石井光夫（東北大学高等教育開発推進センター）

杉原敏彦（広島大学入学センター）

白川友紀（筑波大学アドミッションセンター）

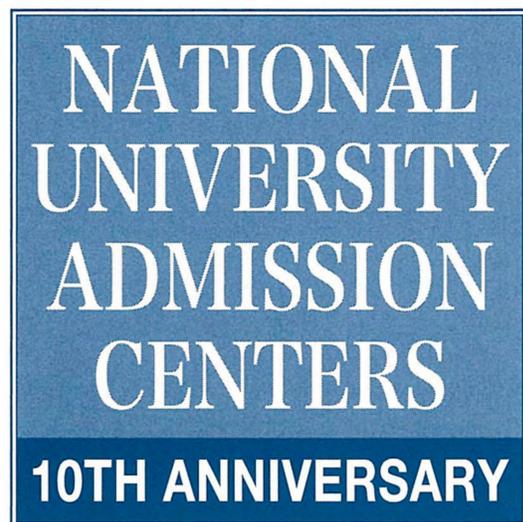
林 篤弘（九州大学基幹教育院）

船橋伸一（富山大学アドミッションセンター）

村松 毅（静岡大学全学入試センター）

田中克己（岡山大学アドミッションセンター）

寺下 榮（静岡大学全学入試センター）



国立大学アドミッションセンター連絡会議 10周年記念誌

発行 国立大学アドミッションセンター連絡会議

編集 静岡大学 全学入試センター(連絡会議事務局)

〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 静岡大学

ac-office@adb.shizuoka.ac.jp

2013年6月発行